第7回

よこはまりは一ラム

報告書

よりそい続ける つながりを育む

♥「おたがいさま」のこころが紡ぐ豊かなまち



社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会 市内18区社会福祉協議会



すら、 よこはま は あったかい

はじめに

コロナですっかり定着した3密の回避。

隣の人が咳をすることが気になったり、握手やおしゃべりをするのもはばかられたり。 マスクで表情全体を見ることができないうえ、小さな声は聞き取りにくい。 でも、マスクをしていても耳元に口を近づけて話すのも遠慮したくなる。

そんな景色が当たり前になっても、地域で気にかけあい、どうやったらつながり続け られるか。今回の地域福祉フォーラムでは、さまざまな工夫をし、つながりを絶やさな いために必死に取り組んできた事例が紹介され、共有されました。

また、コロナ禍だからこそ、これまで見えづらかった困りごとや、既存の施策・サー ビスだけでは解決できない複雑・多様化した課題などが浮き彫りになりました。たとえ すぐに解決に結びつかなくても、地域の中で困りごとを抱えた人に気づき、その人の暮 らしに寄り添い続けることや、多様な機関・団体・企業などが連携して支えあうことが、 どれだけ困難を抱えた人たちを勇気づけたことでしょう。

7回目となる「よこはま地域福祉フォーラム」の全体テーマは「よりそい続ける つながりを育む」でした。北九州から駆けつけてくださった奥田知志様の実践に基づく 基調講演には、多くの共感の感想が寄せられました。

苦労しながら、工夫を重ねた住民同士の支えあい活動を発信する分科会では、永田祐 様、渡辺裕一様、ほか多くの方々のご協力をいただきました。おかげさまで、大変充実 したフォーラムとなりました。

また、前回に引き続き、録画配信をし、神奈川県内はもとより秋田、東京、広島、佐 賀、長崎など全国から 700 名を超える皆様にご参加、ご視聴いただきました。改めて感 謝申し上げます。

本報告書は、きらきらと輝き心が温まる、ストンと心に響く、講演と発表の内容をま とめたものです。横浜のつながり・支えあいの取組が多くの皆様に共有され、各地の地 域活動の参考となれば幸いです。そして、日本各地の地域福祉関係者の皆様が再び生き 生きと地域で活躍なさることを願っております。

> 令和5年3月 社会福祉法人横浜市社会福祉協議会 会長 荒木田 百合

もくじ。

●はじめに ····································
●写真で見る"よこはま地域福祉フォーラム" ·······4
●与真で兄る。よこはよ地域価値フォーフム
●基調講演
一人ひとりによりそえる地域へ 〜ともにいる日常を育む〜
NPO法人 抱樸 理事長
奥田 知志 氏
XII XIII XI
●分科会概要
◆分科会1 ······ 16
緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ
~つながりの価値を見つめなおして~
コーディネーター:同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授
永田 祐 氏
(1)根岸地区社会福祉協議会
根岸地域ケアプラザ
磯子区社会福祉協議会【磯子区】
(2)相沢地区民生委員児童委員協議会
火曜の会
二ツ橋第二地域ケアプラザ【瀬谷区】
(3)ききょうの会
荏田地域ケアプラザ【青葉区】

◆分科会 2	 23
V 111715 4	

「私のまち」を「私たちのまち」に 〜連携で広がる地域の可能性〜

コーディネーター: 武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授 **渡辺 裕一** 氏

- (1)麦田町発展会児童養護施設 聖母愛児園麦田地域ケアプラザ【中区】
- (2)特別養護老人ホーム 白寿荘 養護老人ホーム 白寿荘 いずみ野地域ケアプラザ 泉区社会福祉協議会【泉区】
- (3) 小菅ヶ谷地区社会福祉協議会 株式会社ケイサンタクシー 栄区社会福祉協議会【栄区】



よこはま_{2022 (令和4)年 12月8日} 地域福祉フォーラム

よりそい続ける つながりを育む

~「おたがいさま」のこころが紡ぐ豊かなまち~



令和5年2月1日(水) ~3月24日(金) 動画配信



緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ ~つながりの価値を見つめなおして~

_______________________________ コーディネーターの永田 祐氏







本当に困っている人とつながるために
令支援からはじまる見守りの芽~(磯子区)

・地域の中で自分らしい暮らしを続けるために ~ありのままを受け止め、つながり続ける~

(瀬谷区)

・困りごとを1人で抱え込まないために ~マンション内の見守り・共有の仕組みづくり~ (事意区)

分科会

関内ホール(小ホール)

「私のまち」を「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~

コーディネーターの渡辺 裕一氏







・ふらっと麦田 ~ケアプラザの場を活かした ゆるやかなつながり~ (中区)

・多様な主体で暮らしを支える ~想いをつなぐ「泉サポートプロジェクト」~ (泉区)

・外出を支える 暮らしを見守る タクシー会社との連携 (栄区)



一人ひとりによりそえる地域へ

~ともにいる日常を育む~

NPO法人抱樸理事長 **奥田 知志氏**

私は滋賀県の大津市の生まれで、今は福岡県の北九州市で牧師と、NPOの代表をしています。NPO法人抱樸は、地方都市では比較的大きく職員が100人を超える団体で、活動を始めて35年目に入ったところです。このNPO法人の活動から見えてきた今の社会の課題や私が考えたことなどをお話ししたいと思います。



複合的な問題を抱えるホームレスの実態

私たちの団体は、ホームレスの支援から始まりました。今も毎週金曜日の夜に炊き出しを続けていて、35年目の冬に入ろうとしています。その後、出会った人との縁で「これが必要なんじゃないか」と考えて活動が増えていき、今では27の事業をしています。この35年で、路上からアパートに入った人は3700人を超えています。

出会ってみると、ホームレスの人たちが一番困っているのは「家がない」ことですが、さらによく話を聞いてみると、実はいろいろな問題が複合的にあることがわかってきます。

ホームレス全体の 6 割が多重債務を抱えていました。 驚いたのが、全体の 4 割が知的障害などの障害のある 人たちであったことです。知的障害というのは生まれ つきですが、 $40\sim50$ 歳になってわれわれのところに たどり着くまで、誰にも気づかれずにきています。ス タッフが行うアセスメントで気がつき、本人に「療育 判定を受けませんか」という話をすることが何度もあ りました。

ある人は知的障害で、療育手帳B2が出ました。その手帳を私に見せに来て、「自分は中学校を卒業してすぐに働くことになったけれど、毎回1年足らずでク

ビになる。親きょうだいからは『おまえは努力と辛抱が足らん』と散々言われ、家族関係が悪くなって、家を飛び出した。その後、結局自分はホームレスになってここに来た。自分だけ周りの人と違うと思ってきたけれど、俺は障害があって、俺のせいではなかったんだ」と言って、ほっとしていたのです。こうなると、どこまで「自己責任」と言えるだろうかと思います。

「助けて」と言えない社会

困窮者の支援の中心になる課題は、「自立支援」ですが、よくセットでいわれる言葉が「社会復帰」です。例えば、社会というバケツに人間という水が入っているとして、ぽたぽた落ちてくるわけです。落ちてくるところを地域の皆さんやNPOなどが途中ですくい上げて、上に戻している。これを社会復帰と呼ぶのでしょうが、よく見たら社会というバケツの底に、そもそも穴が開いているのです。これをふさがないと、上に戻しても順番に落ちてきます。ですから、「対個人」という考え方と「対社会」という考え方が同時並行的に進まないといけないと私は思います。困っている人を「自己責任だ」と見捨てず、あるべき社会ということも求めていかないと、社会が成長していきません。

昨年1年間で自ら命を絶った子どもの数は、前年対 比で100人増えて499人、過去最悪でした。少子化が 問題とされている中で、約500人の子どもが自殺しているのです。ヨーロッパやアメリカは、若者の死因の1位は「事故死」ですが、日本の若者の死因のトップは、「自殺」です。

子どもの自殺の要因は何でしょうか。「家庭不和」が12%、「父母からの叱責」が9%、「進路問題」が8%、「いじめ」は案外少なくて2.7%。これは多分、いじめは発覚していないからです。平成30年度文部科学省調べの子どもの自殺要因で私が驚いたのは、「不明」が58.4%だったことです。子どもの自殺の6割が、誰にも相談できず、誰にも悟られないまま、笑顔だった子が翌日死んでいるわけです。子どもこそしんどかったら「しんどい」、「助けて」と言ったらいい。一番いいのは泣けばいい。泣いていたら誰か気がついてくれます。でも泣くことも、逃げることも、「助けて」も言えない中で年間500人も死んでいくのです。

何で子どもたちは「助けて」と言わないのでしょうか。 学校の問題や親子関係があるかもしれませんが、私た ち大人が、やれ「自己責任だ」、「人に迷惑をかけては いけない」と言って、助けを求められない社会になっ ていることが原因の一つではないでしょうか。

数年前に農林水産省の元事務次官が、息子を殺した 事件がありました。息子は中学頃からずっと引きこ もりで、お母さんがターゲットの家庭内暴力でした。 ちょうど家の隣が小学校で、朝から運動会をやってい ました。息子が朝からいらいらして「うるさい」と言 いだし、お父さんは「息子が学校に押しかけて、児童 に危害を加えたらどうしよう」と考え、結果、息子を 殺してしまうのです。「人に迷惑をかけてはいけない と思い、息子を刺しました」というのが警察署でのお 父さんの証言です。人に迷惑をかけてはいけないと思 い息子を殺すところまで追い詰める社会とは、一体何 なんだろうとも思うわけです。

子どもたちから見たら、立派な大人とは自分で全部できる大人だと思うでしょう。でもそんなのは嘘です。大人たちはもうそろそろ、子どもに本当のことを言ったほうがいいです。「実はずっと助けてもらって生きているし、これからもずっと助けてもらって生きていくんだ。人間ってそんなもんなんだ」と。

自立とは依存先を増やすこと

東京大学に熊谷晋一郎という有名な先生がおられます。大きな電動車いすに乗っている小児科の医師です。 熊谷先生の話で印象深かったのは、「自立とは依存先 を増やすことである」とおっしゃったことです。すご くいい言葉だと思います。

子どものころから脳性まひで体が動かなかった熊谷 先生は、周りの大人、特にお母さんは「自分のことを 自分でできないと生きていけないよ」と言って、必死 になって訓練したそうです。しかし脳性まひなので、 リハビリしても一人で立って歩くことはできません。

熊谷さんは、「これはヤバいんじゃない?と思った」と言うのです。「頑張っても一人でできないから、下手すると自分の親はこの子を残して逝けないと思って、自分が死ぬ前に息子に手を掛けるんじゃないか」と思って、熊谷先生は「僕は自立するんだ」と決心したそうです。その自立とは、母親以外の依存先を増やそうと考えたと言うのです。お母さんだけに頼っていると限界がすぐに来る。だったら母親以外の依存先をつくろう、というのです。なるほどと私は感心しました。

ところで皆さん、猿と人間の違いがわかりますか。 猿が進化して人間になりました。では、人間は何が猿 より優れたかというと、進化論でいうと二足歩行と言 語です。

最近アメリカにカレン・ローゼンバーグという女性の古人類学者が論文を出し、私はそれを読んですごく感動しました。彼女は、「今までの進化論は男性目線で書いている。自分は女性目線で進化論を書き換える」として、猿と人間の一番の違いは、出産だと書きました。猿は脳が発達していないから頭が小さい。頭が小さいから、猿は一人で産むことができるのです。でも人間は、この骨格になって頭が大きくなったので、産道が複雑に曲がり、自分で赤ちゃんを取り上げることができなくなりました。「これこそが猿と人間の違いであり、進化だ」とその本は書いていました。

進化というのは、前の段階でできなかったことが、次の世代でできるようになることです。しかし、カレン・ローゼンバーグが書いているのは、「一人で産めたのに、人間になって一人で産めなくなった」。これ

は退化ではないのかと思いますが、「これこそが人類 の進化だ」と書きました。これはすごく大事で、つま り人間になったことで、一人でできなくなったので す。そうなると、「自分でやれ」と自己責任をやって いたら、この国は「猿の惑星」になるでしょう。子ど もたちに教えないといけません。「おまえたちは誇り 高き人類だ。人類とは何か。一人で生まれるのではな く、誰かに手伝ってもらって初めて生まれる、人間の 本質はそこにあるのだ」ということを。

この一連の考え方を見ると、人間とは何かという話がベースに来ないと、まちづくりや社会形成、あるいは国家も含めて何が一番大事かという話が抜けてしまうでしょう。

「助けて」を言い、言われるまちづくり

私は「助けて」と言えることが、まちづくりのキーワードになるべきだと思います。しかし、それだけでは足りません。困ったときに「助けて」と言って、誰かが「どうした」と言ってくれたら、自分は大事にされていると思えます。これを「自尊感情」といいます。しかし、これだけではなく、誰かから「助けてと言われる」まちをつくらないといけないからです。誰かから「助けて」と言われたら、「こんな僕でも必要とされ、役に立てる」という、「自己有用意識」が育ちます。自尊感情と自己有用意識の両方を育てることができる言葉が「助けて」なのです。

助けてもらっている人は、「ありがとうございます、すみませんね」と、いつも感謝とともに謝っています。一方で、誰かから「ありがとう」と言われる場面が3回に1回でもあれば、気持ちは随分変わります。人間は「助けて」と言い、「助けて」と言われる、この双方向性のあるインタラクティブなものでないと駄目なのです。

【「つながりをつくる」という支援

34年前にホームレスの人に、おにぎりと豚汁を持って夜のまちを歩きながら一人ひとり訪ねて回り始めたときに、私たちは一体何のために炊き出しをするのかを議論しました。「食べられない人にご飯を配るのだから、これは憲法第25条の生存権に関わる命を守る活動である」と考えて始まりました。

しかし、1か月もしたらわかります。1週間に1回お弁当を1個配って「命を守っている」とはちょっと言いすぎでしょう。かといって、朝昼晩、毎日配るという力量もないし、お金もない。われわれは再び、この炊き出しの意味は何かを議論しました。そのときにあるスタッフがこう言いました。「確かに週に1食しか解決していないけれど、一方であのお弁当は友達の家を訪ねるときの手土産のようなもので、俺たちは関係を結ぼうとしているんだ。そこにもう一つの意味があるんじゃないか」と。つながりをつくることが、私たちにとって非常に大きな意味だったのです。

「助けて」と言えない背景には、社会的孤立という深刻な日本の現状があります。OECD (経済協力開発機構)が出している先進国の調査では、孤独を感じている子どもの割合が、日本は30%近くあり、ダントツ1位です。日本は3人に1人の子どもが「孤独だ」と答えたのです。第2位のアイスランドで10.3%、10人に1人。イギリスは5%ですから20人に1人が孤独。同じような島国で、20人に1人の子どもが孤独なイギリスと、3人に1人の子どもが孤独と答えている日本。これはものすごい差です。

さらにOECDが出した「相対的貧困率」、つまりお金で困っている人の率は、アメリカが17%で、日本が16%。一方、家族以外の人と日常的に関わりがない「孤立率」は、アメリカは3.1%、日本は15.3%で、アメリカと日本では、日本が5倍孤立しているのです。これは意外でしょう。アメリカは個人主義の国で、一方の日本は縁(えにし)の国ですから、もう少し人との関わりが深いのではないかと思っていたら、実はアメリカの5倍も孤立しているのです。

「アメリカは、お金はないけれど、友達はいる社会」で、日本は「お金はないし、友達もいない社会」で、これからまちをつくるとか、国の制度・政策を考えるときには、この2つを同時に考えないと難しいよ、という話になってきているのです。

厚生労働省が令和元年の12月に出した「地域共生社会に向けた包括的支援と多様な参加・協働の推進に関する検討会」の最終取りまとめによると、国が行う社会保障は現金給付か福祉サービスなどを含む現物給付です。現物給付というのは障害福祉制度や介護保険制度、医療保険制度などの福祉サービスなどを含むサー

ビス給付のことです。つまり、国がカバーできるのは 金か物かといっているわけです。

一方で、つながりとかケアを誰が今までやってきたかというと、家族・地域、あるいは日本が特徴的なのは会社です。戦後の日本の社会は、サラリーマンの終身雇用制で、企業が働いている人と家族分の給料、社会保障、健康保険組合などをひっくるめて全部見てきました。けれども、2000年代に入ってくると、正規雇用と非正規雇用の割合が変わっていき、今は正規雇用で働いている人は6割しかいません。つまり、企業が家族を丸ごと支えることができなくなり、家族も限界になり始めているのが今の日本社会です。

2018年に、イギリスは日本に先んじて「孤独問題担当国務大臣」を置きました。調べると、「孤独になると肥満になる。たばこを1日15本吸う以上に健康被害、病気になる」ことがわかり、その治療費だけで年間320億ポンド(日本円で4.9兆円)多めにかかっているそうです。今、倍にするといわれている日本の防衛予算は5兆円です。

さらに難しいことに、イギリスの孤立率は日本の孤立率に比べて3分の1ですから、日本の場合は単純に5兆円の3倍となると15兆円多めに、孤独による病気の治療費がかかっているかもしれないという話です。

孤立・孤独と経済的な困窮の関係

日本も去年、令和3年に「孤独・孤立対策担当大臣」が置かれました。そのとき首相官邸で、私や、こども食堂をやっている湯浅誠さんらが集まって、孤立・孤独をどうしようかという話をしました。そこで、孤立・孤独の問題と経済的な困窮の問題の関係について見たいと思います。なぜ孤立が問題なのかというと、働く意欲や生きる意欲に響くからです。

うちのNPOには、野宿状態だけでなく、子どものころから虐待の中を生き伸びてきたサバイバーが来ます。最近やって来た22歳の女性は、リストカットどころではなく、全身カット、首まで傷だらけです。いろいろな若者が来ましたが、同じように言うのは、「私なんかどうでもいい」です。自分の中から「その気」が湧いてこない。それは絶望するときです。

あるホームレスのおじさんは、「毎晩寝る前に俺、 お祈りしてるんだ。二度と目が覚めませんようにっ



て」と言いました。ホームレスになるというのはそういうことなんだなと、つくづく思いました。そこまでいった人、毎晩このまま死んだらいいと祈る人が、もう一回立ち上がるためには何が必要でしょうか。それはやはり、外から差し込んでくる光、つまり「外発的な動機」です。「この子を残して逝けない」とか、「あの友達がずっと自分に声をかけてくれるからもう一回生きよう」というふうに、外から来るのです。

面白いおじさんがいました。そのおじさんは10年 以上野宿をしていたので、私はずっと弁当を持って いっていました。おじさんは「もうええ。俺はこの冬 死ぬから」と言い続けて10年経ちました。

あるとき、突然「奥田さん、俺、自立するわ」と言い出したのです。びっくりして「どうしたん?」と聞いたら、「もう10年間あんたらがあんまりしつこいし、こんな草むらまで毎週来るのも大変やろうから、そろそろ自立してやるわ」と言ったのです。思わず私は「ありがとうございます」とお礼を言っていました。

今の世の中は、「悪くなるのはおまえが努力しなかったからだ」と、全部自己責任ですよね。一方で、悪くなったのは人のせいでしたが、野宿生活から脱するのも、「奥田たちがあんまりしつこいから」だったのです。

今、外発的な動機が、孤立という状況の中で失われています。これは子どもに至るまで広がっていて、この国は孤立しています。そうなると、自分が諦めた日が、終わりの日です。そこを乗り越えていくには、他者との関係が必要なのです。

| ハウスレスとホームレス

私たちは、路上生活者の人たちの支援を始めた30

数年前、最初に気づかされたのは、「ハウス」と「ホーム」は違うという考え方でした。人間というのは「ハウス」、つまり家に象徴される家、仕事、お金、健康保険がないという経済的な困窮と、「ホーム」という言葉に象徴される、人と人との関わりがなくなるという、二つの困窮があるのです。

これを最初に教えてくれたのは、ホームレス襲撃事件の被害者でした。北九州市では90年頭に、あるおじさんが毎晩、若者から暴力を受けました。最後には寝ている上からブロックを落とされましたから、本当に危なかった。その人が「何とかしてくれ」と私のところに来ました。それで北九州市に相談したり、どうも中学生らしいので近くの学校を回ったりしました。そのやりとりの中でおじさんが、「奥田さん、夜中にホームレスを襲いに来ている中学生は、家があって親はいても、誰からも心配されていないんじゃないの?そういうやつの気持ち、俺はわかるな」と言いだしたんです。

私はその言葉に、雷に打たれるぐらいの衝撃を受けました。私は「中学生とホームレスは全然違う。だって加害者と被害者だし、家がある人と外で暮らす人だから」と思っていたけれど、このおじさんは、「加害者の中学生は、家があっても帰るところがない人」だというのです。これを私は、「ハウスはあっても、ホームがない人」と考えたのです。

私が30年ぐらいずっと「ハウスレスとホームレスがあり、問題は経済的困窮のみならず社会的な孤立だ」と言っていたら、平成27年に生活困窮者自立支援制度ができました。その理念に、「経済的困窮と社会的な孤立」という文章が出てくるようになりました。

さて、私は厚生労働省のホームレス実態調査の研究 委員でもあるのですが、路上生活者は確実に減ってい ます。しかしホームレス、つまり、孤立状態になって いる人は増えているので、地域をどうつくっていくか というのがとても大事です。

従来の支援は、「その人が抱えている問題をどう解決するか」でした。例えば、仕事がない人にどうやって就労の支援をするか。これは「問題解決型支援」です。しかし今後は、つながり続けることに目的を置く支援。私たちは「伴走型支援」と呼んできましたが、この二つの支援の形を頭に入れておく必要があります。役割

で考えると「僕は伴走型担当、あなたは解決型担当」となってしまうけれど、そうではなくて、一人の支援をする人の中に伴走型のアプローチと解決型のアプローチと二つあるのだということです。これも長く言い続けて、厚生労働省が昨年から始めた重層的支援体制整備事業の中にこの二つの支援、解決型と伴走型を書き込まれました。

社会的孤立と経済的困窮

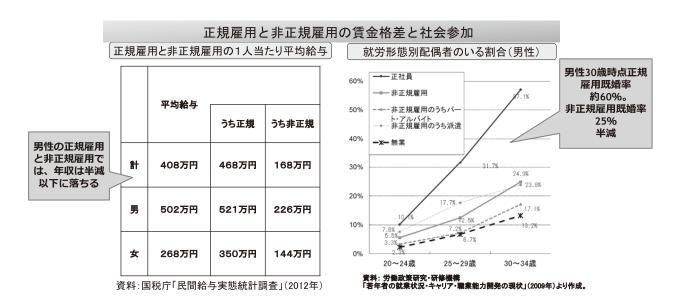
伴走型支援の効果について、まずは経済的な困窮と 社会的な孤立がどんな関係にあるかを、図1で見ま しょう。これは国税庁が出している平均年収です。正 規雇用の男性の平均年収は521万円で、非正規雇用は 226万円です。正規と非正規での落差がすごいでしょ う。また、正規雇用の男性と女性の年収は200万円も 差があります。女性の非正規雇用はパートなども入っ ているので単純に比べられませんが、144万円まで落 ちます。

男性だけを見てください。右の折れ線グラフは、就 労形態別で結婚しているか・していないかです。一番 端が30歳のラインです。正規雇用の男性が30歳時点 で結婚している率は57.1%で、非正規の男性は24.9% です。正規・非正規で給料は半分、結婚率も半分以下 になるのです。少子化や人口減少が大きな問題ですが、 スタートラインがこんなに違うわけです。

結局、金の切れ目が縁の切れ目というやつで、第1のスパイラルは、お金がなくなると人との関係が切れ、「結婚できない」という話になります。第2のスパイラルは逆です。人との関わりがなくなると、お金がなくなる。これは先ほどいったように、「外発的な動機がなくなるから踏ん張りが利かない」ということです。

野宿11年の西原さんのケースをご紹介しましょう。 私は小学校や中学校で講演会に呼ばれると、最近は野 宿当事者・経験者と一緒に行って、野宿経験談を話し てもらいます。

先日、小学校に行って西原さんが質問を受けました。 子どもが「食べ物はどうしていたんですか」と聞いた ら、「ごみ箱から拾って弁当の残りとかを食べるんだ」 と答えました。子どもたちが驚くと、「でも、例えば コンビニのおにぎりを拾ったら、そのまま食べちゃだ めだぞ。あれば、手の中で1回割ってみるんだ。糸を



☞金の切れ目が縁の切れ目

図1 経済的困窮が社会的孤立を生む(結婚できない)

引いたら食べちゃ駄目だからね」と。子どもは「糸は だめ」とメモしています。面白いでしょう。

次に子どもが、「何で野宿になったの?」と聞きま した。「実は今から40年ぐらい前、おじさんは結婚し て、2歳の子どもがいた。当時のおじさんは、飲む・ 打つ・買うでとっても大変だった。そうしたらあると き、うちの母ちゃんが、『お父ちゃん、たばこ買いに 行ってくる』と言って夕方家を出たきり帰ってこな かった。あれから40年。うちの母ちゃんはどこまで たばこを買いに行ったのかな」と答えました。結局西 原さんは奥さんに捨てられてしまい、2歳の子どもと 実家に帰りました。おばあちゃんが孫の面倒を見なが ら、西原さんも長距離トラックの運転手になって、20 年間頑張って働きました。20年たっておばあちゃん が亡くなり、息子は就職が決まって家から出て、再び 一人になりました。それから数か月したとき、「それ までは財布の中のお金は、おばあちゃん・息子・自分 が食っていくための生活費だった。一人になって、あ るときふっと財布を見たら、全部小遣いに見えた | と 言うんです。「その日からまた飲む・打つ・買うに戻っ た。1年もしない間に駅の横に段ボールを敷いて寝て いた」と。野宿になるのに、家や仕事をなくすのは最 後のきっかけで、問題はやはり内発的動機です。「何 のために働くのか」がなくなったときに崩れるのです。 作家の高橋源一郎さんと対談したときに、高橋源一郎さんが「奥田さん、人とのつながりがなくなるということは、言葉を失うということだよね」と言いました。さすが作家だなと思いながら、「そう。人とのつながりがなくなると言葉がなくなる。人とのつながりの中で生まれる言葉は、その人が生きる意味、動機、もっというと物語が生まれるということなのではないか」と答えました。

面白い話で、横浜も東京も大阪も九州も、ホームレ スの人は自分の食べ物のことを「餌」と言う人が多い です。残飯を食べているから、犬猫と一緒で餌だと言 うのです。しかし毎週金曜日の夜、私たちが配ってい るものを、「じゃ、これは何?」と聞いたら「これはお 弁当 | と言い換えるのです。彼らはコンビニから出て くる、期限は切れているけれどついさっきまで売っ ていたお弁当などを食べますが、そっちは餌なので す。うちのお弁当はボランティアがつくっていて、1 食200円しかかけられませんが、こっちは弁当と呼ぶ のです。高橋源一郎さんが言うとおり、物に人が関わ ることで、物が物語化していき、言葉が生まれている のです。この物語を生み出せるかが、人との関わりで す。これが、私は「地域づくり」の意味だと思います。 だから、いくら物と金を用意しても、人との関わりが ない限り物語にならないのです。

現在の「家族」

今から42年前、昭和55年の世帯の形の第1位は「夫婦と子ども」で、42%でした。第2位は「3世代同居」のサザエさん型で20%、第3位が「一人暮らし」でした。今から40年前は、家の中に家族が一緒にいるというのが62%あったのです。

40年たって、令和2年に内閣府が出したデータでは、第1位が「一人暮らし」で38%、第2位は「夫婦と子ども」で25%。サザエさん型は最下位で、7%しかいません。

問題は、私たちの頭の中が40年前とあまり変わっていないことです。『サザエさん』を今でも見ていますが、あれは100世帯中7世帯しかいない話なのです。「地域の中には家族と一緒に暮らしている人がほとんどで、自分はたまたま一人暮らしだ」と思っている人が多いですが、今一番多いのが一人暮らしです。この頭の切り替えが利いていません。

私たちの頭の中は40年前とあまり変わっていないので、「家族が何とかしてくれる」と思い込んでいます。いない家族に過度な期待が集まり、ヤングケアラーや8050問題などが露骨に出てきているのが現代です。

図2は地域包括ケアシステムの図です。一番下のお 皿が本人と家族。植木鉢が住まいと住まい方。植木鉢 の中の土が生活です。その上に医療制度・介護制度・ 福祉制度という制度の葉っぱが咲いている絵です。そ もそも私はこの絵は嫌いで、制度が私たちを支えてほ しいと思いますが、この絵も見ようによっては現代の 課題を示してくれています。どんな立派な制度が上に あっても、本人・家族・住まい・地域の生活がちゃんと していないと、うまく制度とコミットしないのではな いか。ここが今、抜け落ちようとしているのです。

だから、40年前に設計された社会と、今の社会で 随分考え方を変えていかないと追い付かないのです。 制度の隙間がよく問題にされますが、今日本の社会で 一番の隙間は「本人と家族」のお皿の部分です。もと もと家族がやっていたところが脆弱(ぜいじゃく)化 して、しかし周りの期待は「身内の責任でしょう」と 言い続けているから、発生した問題をうまく処理でき ないのです。

家族の中の問題は、基本的に口出しできません。ここの新たな隙間をどうするか、新しい地域共生社会のステージはここにあるのではないかと思います。今まであった既存の家族や地域の形をどう変えるかだけではなくて、そもそもなくなった部分に新たなものをどうつくるかが、実は地域をつくることのステージなのです。



三菱UFJリサーチ&コンサルティング

出所) 植木鉢の絵:三菱UFJリサーチ&コンサルティング「地域包括ケアシステム構築に向けた制度及 びサービスのあり方に関する研究事業報告書」(地域包括ケア研究会)、平成27年度老人保健健康増 通等事業。

すまい・すまい方・生活 支援など生活基盤 がある

医療介護サービスなど が効率的・効果的に 提供できる



この前提で葉っぱが青々と茂る? しかし、その前提が無くなったら、弱くなったらがうする?

家族機能の社会化

そこで、私たちは五つの家族の機能を想定して、「家 族機能を社会化する」ということを30年程やってきま した。

一つは、「家庭内のサービス提供」です。家庭の中で子どもの面倒を見るとか、衣食住がちゃんと備えられているなどです。これは介護保険制度で、家庭の中にあった介護が社会化されました。あるいは今、コンビニエンスストアでは調理済みのおかずを1人分ずつ売っています。これは家庭内でなされていた機能が社会化したという話でもあります。

二つ目は、家庭のもつ「記憶の装置」です。それは 思い出だけではなくて、ずっと一緒にいるからわかる 情報の蓄積があります。例えば、中学生のお兄ちゃん が熱を出して発疹が出たとします。「この子、はしか もしているし、水ぼうそうもしているから、風疹では ないか」と、過去のデータから導き出せるのです。こ れは赤の他人では難しいです。特に個人情報保護法以 降は、他人が個人の情報にアクセスすることが難しく なりましたが、これは家族がいる前提です。「家族が いない人はどうするの」という話になるわけです。

三つ目が、「家庭の中でカバーできない状態になったら地域の資源へと結ぶ」つなぎ・戻しです。例えば、 入院する病院を探すのは家族の役割でしたが、行った病院がよくなかったら戻して、新しいところにつなぐ。 このつなぎ・戻しの連続的な行使も家族の役割でした。

四つ目は、「助けるほうの機能」です。家族の中には何らかの役割がありました。お兄ちゃんは犬の世話、お姉ちゃんは金魚の世話といった役割が子どものころからあって、出番がありました。これも、家族の機能ですごく大事な部分だったのです。

五つ目は、「何げない日常」です。ご飯を食べた後にテレビを見ながらぐだぐだと過ごす、あの何気ない時間です。今、世の中では全部意味や成果が問われがちですが、家族はそんなことはいわず、一緒にいることに意味があったわけです。

私たちはプロのスタッフで家族の機能、生活のサポートを行いましたが、とてもプロのスタッフだけでは賄えません。お金も、北九州市が一部出してくれましたが、ほとんど寄付でやってきました。そこで、家

族機能を社会化するために、赤の他人が「なんちゃって家族」になれるように、地域互助会をつくりました。

今、私の地域で約270人が入っています。その中で 元ホームレスの当事者組織「なかまの会」が100人、つ まり3人に1人は元ホームレスの人たちです。バス旅 行も行くし、ボランティア活動もします。入院した互 助会の人の見舞いにも行くし、運動会もやります。

家族の機能で最も特徴的なのは葬儀です。お葬式はさすがに家族しかやらないですが、われわれは互助会が「赤の他人の葬式を出す」という仕組みを地域でつくりました。今年の秋にあった「偲ぶ会」という法事では、今まで地域で送り出してきた198人の写真が並びました。最後にふるさとに戻れなかった人たちが多いので、全員で『ふるさと』を歌って終わりました。お葬式では、全く関係ない人たちが、骨上げをして帰ってきます。これは私の教会でボランティアですべて納骨をしています。

これをやることによって社会的な問題が一つ解決しました。今、日本中で850万戸ぐらい空き家がありますが、同時にアパートに入れてもらえない人の問題があります。亡くなったときに引受人がいないため、大家が高齢単身者に貸したがらないのです。そこで、この仕組みを10年ほど前につくってから、大家の貸し渋りがなくなりました。互助会が残置物の処分をすべてやることになったからです。家族機能の社会化は、単に人とのつながりをつくり、本人が生きる意欲を醸成するにとどまらず、単身化・ホームレス化に向かっている日本の社会問題の解決にもつながるのです。

私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。





緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ

~つながりの価値を見つめなおして~

実践報告

(1) 本当に困っている人とつながるために ~食支援からはじまる見守りの芽~

> 根岸地区社会福祉協議会/根岸地域ケアプラザ/ 磯子区社会福祉協議会 【磯子区】

(2) 地域の中で自分らしい暮らしを続けるために ~ありのままを受け止め、つながり続ける~

相沢地区民生委員児童委員協議会 / 火曜の会/ ニツ橋第二地域ケアプラザ 【瀬谷区】

(3) 困りごとを 1 人で抱え込まないために ~マンション内の見守り・共有の仕組みづくり~

ききょうの会/荏田地域ケアプラザ 【青葉区】

ねらい

さまざまな事情により「生きづらさ」を抱える人に、地域の中で住 民や団体・機関がつながり、支えあう取組が育まれています。困りご とを抱えた人が孤立することなく、安心して地域で暮らしていくため に、一人ひとりの困りごとにどのように向き合い、支えることができ るでしょうか。この分科会では、身近な地域でつながる住民ならでは の支えあいの大切さと、住民と専門職がともに暮らしを支える地域づ くりについて考えます。

コーディネーター

永田 祐氏

同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授

❖専門は地域福祉ほか。立教大学、愛知淑徳大学の講師等を経て現在に至る。「志」のある実践者同士が出合い、つながり、つくりだす地域でのさまざまな活動やそれを可能にするための仕組みづくり、市町村を中心とした「困っている人」を真ん中においた支援の仕組みづくりについて研究している。また、社会福祉士として、成年後見など、権利擁護の活動にもかかわっている。



「私のまち」を「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~

実践報告

(1) ふらっと麦田

~ケアプラザの場を活かしたゆるやかなつながり~

麦田町発展会/児童養護施設 聖母愛児園/ 麦田地域ケアプラザ 【中区】

(2) 多様な主体で暮らしを支える

~想いをつなぐ「泉サポートプロジェクト」~

特別養護老人ホーム 白寿荘/養護老人ホーム 白寿荘/いずみ野地域ケアプラザ/泉区社会福祉協議会 【泉区】

(3) 外出を支える 暮らしを見守る タクシー会社との連携

小菅ヶ谷地区社会福祉協議会/株式会社ケイサンタクシー/ 栄区社会福祉協議会 【栄区】

ねらい

支えあう地域づくりに向けては、支援する担い手もさまざまな主体とつながっていくことが重要です。住民だけでなく、福祉施設や企業、NPO など既存の枠組みだけでない新たなつながりによって、地域の課題解決やまちづくりの新たな可能性が広がります。

この分科会では、新たなつながり先のヒントやそのプロセス、協働するにあたり配慮した点など、それぞれの強みを生かした連携を生み出すポイントについて共有します。

コーディネーター

渡辺 裕一氏

武蔵野大学 人間科学部 社会福祉学科 教授

❖駒澤大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士後期課程修了。博士(社会学)。 東北女子短期大学生活科講師、健康科学大学健康科学部福祉心理学科准教授、武蔵野大学人間科学部社会福祉学科准教授を経て、平成29年4月より現職。専門は高齢者福祉とソーシャルワーク、ソーシャルワーク教育。





緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ

~つながりの価値を見つめなおして~



実践報告に先立って、これからの地域社会の変化や顕在化しているさまざまな課題についてお話ししたいと思います。一つ目は高齢化の2040年問題です。2040年は団塊ジュニアの世代が高齢者になる年で、日本国民の4割近くが高齢者になります。二つ目は、都市化による地域のつながりの希薄化が深刻になることです。三つ目は単身化です。結婚しない若い人たちが増え、家族がどんどん小さくなっています。2040年までに約4割が単身世帯になるといわれ、家族に頼れない人たちが増えていきます。四つ目が、非正規化です。安定した雇用に就けない人が増加しています。これらの結果、少子高齢化だけではなく、社会的孤立が大きな社会問題になってきています。

今後の変化としては、平均寿命が延び、人生100年時代になります。一方で日本の人口はどんどん減少していくので、高齢者が力を発揮して地域で活躍する社会にしていく必要があります。

また、社会的孤立の深刻さを示す典型的な現象が「8050問題」です。これは、80代の高齢者と50代の子が同居していて、高齢者よりも息子・娘世代の人たちが社会課題を抱えている世帯のことです。

長引くコロナ禍の影響で、孤立が一層深刻になっていることも問題です。その結果、自殺者数が増加に転じていて、特に女性の自殺者数が増加しています。コロナ禍は女性が従事する産業に大きな影響を及ぼしたからではないかといわれています。さらには外出自粛による高齢者の心身への影響も非常に懸念されています。

こうした地域課題を踏まえて、現在、国では「地域 共生社会」というコンセプトを打ち出しています。こ れは、支え手と受け手にわかれるのではなく、障害の



コーディネーター

永田 祐 (同志社大学 社会学部 社会福祉学科 教授)

ある人や認知症の人たちなどが、地域の中で役割を 持って活躍できる出番をつくっていこうという考え方 です。ここでは、地域共生社会における地域と専門職 の役割を事例から考えてみましょう。

お父さんが82歳で、お母さんが80歳、本人が51歳という8050の世帯があったとします。お父さんは介護保険を申請したいけれど、引きこもりの息子のこれからが心配で躊躇しています。

10年前を想像してみましょう。本人は41歳で、お 父さんとお母さんはまだ70代前半です。自分たちで 何とかしようと思っている時期でしょう。

10年後はどうでしょうか。お父さんは92歳で、本人は61歳。こうなると深刻で、もっと早いうちに SOSを出してくれたらよかったのに、と思うでしょう。この「10年前、今、10年後」という視点で、この後の事例も聞いていただければと思います。

困っている人は、自らSOSの声を上げることが難しいことがあります。障害が隠れていたり、いじめの影響で人と接するのが怖いという場合もあるかもしれません。理由はさまざまですが、自ら声を上げられない人たちは発見が遅れ、結果として、深刻になってから初めて専門職とつながることになります。先ほどの事例の「10年後」です。こういったSOSを出せない人た

ちに対して、地域だからこそできることを考えていた だきたいのです。日頃の関係の中で地域の皆さんに気 づいてもらう。そして専門職につないでもらい、地域 と専門職が一緒に支援を考えていくことが重要です。

私たちは生活の中で、さまざまな役割を持っていま す。社会的な孤立状態にある人はその役割がなくなっ てしまうことで、自分が必要とされているという気持ちを持ちにくくなってしまいます。SOSを出せるつながりのある地域をつくっていくのは、地域の皆さんの力だと思います。そして出てきた課題を受け止めるのは専門職の力です。それぞれの役割があるので、ぜひ事例の中でも両者の協働に着目していただきたいです。



本当に困っている人とつながるために ~食支援からはじまる見守りの芽~

根岸地区社会福祉協議会/根岸地域ケアプラザ/ 磯子区社会福祉協議会 [磯子区]

坂井 ある日、区社会福祉協議会(以下、区社協)から「コロナ禍による減収や物価の高騰により、根岸地区でも生活福祉資金の借入や食支援の相談件数が増えている。また、企業や農家からのお米や食品の寄付が潤沢にあるので、根岸地区で活用できないか」というお話をいただきました。そこで、誰もが利用できるフードドライブを開催したいと考えました。今後の区域展開も視野に入れ、地区社会福祉協議会(以下、地区社協)分科会会長で根岸地区社協会長の須川さんに相談しました。

須川 ケアプラザ・区社協からの提案に初めは戸惑いました。困っている人がいるだろうと肌感覚では感じていましたが、本人からの声は入っていませんでした。近くの人に「助けて」とは言いにくいと思います。イベント的に行われる食支援も、本当に困っている人が来るのか疑問を感じていました。ただ、困窮している人への直接的な支援は荷が重いですが、寄付をお願いするくらいならできるのではと思いました。

藤井 不安や荷が重いという思いを受け止め、地区社協だけではなく、ケアプラザと区社協が一緒に取り組むことを確認しました。話し合いを重ねたことで、3者が納得してフードドライブを実施することになりました。

坂井 話し合いから根岸地区フードドライブプロジェクトとして、「お互いに助け合う仲間を増やす」「地域組織・地域資源を知ってもらう」「個別の困りごとを把握する」の三つを目的に開催することにしました。地区連合町内会(以下、地区連合)・地区社協・ケアプラザ・



須川さよ子(根岸地区社会福祉協議会 会長) 坂井真砂子(根岸地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター) 藤井 春菜(磯子区社会福祉協議会)

区社協の共催とし、周知は地区連合に協力をお願いしました。寄付と配分の二つを軸に取り組みました。

藤井 令和3年に実施した第1回フードドライブプロジェクトは、ケアプラザに1か月間寄付ボックスを設置し、たくさんの寄付が集まりました。ケアマネジャーに物品をあずけてくれた高齢の方もいて、「役に立ちたい」という意識を持つ人がたくさんいると気づきました。寄付をしてくれた人には、お礼状を送りました。

坂井 食品配分会は申し込み制としました。家庭の生活状況に合わせてお渡しできるように申込書には家族構成や年齢、使用している調理器具、食品が必要な理由を記載してもらいました。幅広い世代に利用してもらうため、電話、FAX、二次元コードから申し込みができるようにしました。本当に困っている人に情報を届けたいと思い、町内会の掲示板、班回覧、関係機関への案内、配架依頼、個別のポスティングなど、さ

まざまな方法で周知しました。

須川 12月に第1回食品配分会を実施しました。申し込み時に把握した内容を参考に、前日に配付品の準備をしました。例えば子どものいる世帯にはお菓子を多めに入れ、炊飯器のない世帯にはレトルトご飯を入れました。また、日用品などが自由に選べるコーナーも用意し、必要なものを持ち帰っていただきました。袋には地区社協のメッセージカードと関係機関のパンフレットを同封しました。

当日は事前申し込みのあった8世帯と当日参加の1 世帯、合計9世帯が来所しました。内訳は、一人暮ら しの高齢者、大家族、生活困窮世帯、ひとり親家庭、 単身者などでした。気になる世帯にはケアプラザと区 社協で困りごとの聞き取りを行いました。

困っている人に届けたいと始めた食品配分会。少し ハードルの高い事前申し込み制にしたことで本当に 困っている人に届けることができ、アンケートでも続 けてほしいという希望が多くありました。継続するこ とが大切と感じ、令和4年度は地区社協の事業として 2回実施することにしました。

藤井 令和4年度は4月から第2回の準備を始めました。6月に1か月間寄付を募り、7月に配分会を実施し、14世帯が利用しました。

坂井 2回目の開催では、タイトルを「フードパントリー」から「食品配分会」に変更しました。地域からも「このほうがわかりやすい」という声がありました。 チラシを小中学校で全校配布したところ、子育て世代からの申し込みが増えました。

7月の開催でとても暑かったので、地域の皆さんの 思いやりから、アンケートコーナーにお茶とあめを用 意しました。そこはちょっとしたサロンになり、アン ケートを記入しながら世間話をしたり、困っているこ とを話したりする場となりました。

須川 前回同様に事前申し込み制とし、その世帯に合った食品を準備しました。当日は専門職の相談室を用意しましたが、そこでの相談はなく、お茶のコーナーで利用者からのお話を聞くことができました。終了後のアンケートでは、「温かく声をかけてもらってうれしかった」という声が挙がりました。

藤井 配分会で把握された困りごとは、地域包括支援 センターにつないだり、ケアプラザ内で情報共有して います。特に気になる世帯には、こまめに訪問しました。例えば転入してきたばかりの一人親家庭は、子どもが3人いるけれど家電がなく、子どもの入学のための学習用品も用意ができないとのことでした。そこで地域のボランティアによる手づくりの給食袋などを提供しました。後日学校を通して助かったとのお礼の言葉をもらいました。

また、介護離職し、生活に困窮している女性の利用 もありました。1回目は配分会の終了時間後に来所し、 廊下で職員とのみ会話をしましたが、2回目は自ら会 場に入り、職員や会長と今の生活状況について話して 要望を伝えてくれました。

須川 1回目はおどおどして話しかけられる状態ではありませんでしたが、2回目はたわいのない話で盛り上がりました。地区社協で個別の困窮支援をすることは難しいと思っていましたが、2回の配分会を通して、ニーズをキャッチし支援機関や地域につなぐ必要があると感じました。継続することで利用者との関係を築き、地域のさりげない見守りにつなげていきたいと考えています。

坂井 困っている人たちに年に何回かの食品配分会を行うことが根本的な解決になるわけではなく、解決には制度や公的な仕組みが必要です。しかし、さりげなく見守ってくれている人がいる、そんな場所があると思えることが、孤立しそうな人を孤立させない地域の力だと思います。地域の中の気づきをケアプラザや区社協が必要な制度や機関につなぐことで、安心できるまちになると思います。3者で継続していくことで、気づきやつながりの芽を育て、気にかけあうことの意義や価値を広げていきたいです。

藤井 プロジェクトを通じて地域の人からたくさんのご 寄付をいただいたことや、思いやりから生まれたお茶 コーナーを見て、地域の力が大切だと改めて感じました。

三つの団体がしっかりタッグを組んだ取組で、専門職と役割分担をして実施したのが良かったところだと思いました。お茶飲み場で会長がいろいるな悩みごとを拾われたのは、地域の力だと思いました。メッセージカードを入れる、配付物の中身を考えるなど、地域の皆さんの細やかな配慮が活動の中に表れている、素晴らしい事例でした。実際何軒に配ったかだけではなく、その人たちの心がほどけたか、そこに何か新しいつながりができたか、がすごく大事だと改めて思いました。



地域の中で自分らしい暮らしを続けるために ~ありのままを受け止め、つながり続ける~

相沢地区民生委員児童委員協議会/火曜の会/ ニツ橋第二地域ケアプラザ【瀬谷区】

吉井 本日は火曜の会の平本さんが急遽登壇できなくなったため、宮野が代読で発表させていただきます。

紅林 相沢地区のさまざまな活動の中から、今日はお 弁当の配達をする「火曜の会」と、生活支援のボラン ティア「相沢助け合いの会」を紹介します。

火曜の会は平成14年に相沢地区社協が配食グループとして立ち上げました。毎週火曜日に活動しています。 発足当初は10人程度の申し込みでしたが、今では50人 分のお弁当を4グループにわかれてつくっています。

相沢助け合いの会は、相談があったらまずは現場に 行ってみることを大事にしているグループです。メン バーでできないことは他のボランティアグループや区 社協などを紹介しています。

地域で見守りをしている方の事例を紹介します。A さんは夫を亡くして以来、一人暮らしです。以前は民 生委員をしていて、現在も家庭防災員の活動をしてい ます。長い間地域の活動に携わってきた人です。

宮野 平本さんはAさんと同じ町内で、婦人会の活動を通じて顔を合わせる関係でした。いつもにこやかで社交的な人という印象だったそうです。火曜の会でAさんはお弁当を届けるボランティアをしています。集金したお金を自分のポケットに入れたまま忘れてしまい、後で平本さんのご自宅に持ってくるなど、「あれ?」と思うことがあっても、活動を続けてきたそうです。

吉井 ケアプラザが関わりを持ったきっかけは、不動産屋から「家賃を滞納している認知症の高齢者がいる」と相談が入ったことでした。Aさんはリースバックという不動産売買で、一般の10分の1ほどの金額で自宅が売却され、現在は賃貸契約となっていることがわかりました。また、売買で得たわずかなお金も床下の消毒などに使われ、毎月何の支払いかわからないお金を払って家賃が払えず、食料も買えない状況でした。

ケアプラザは区社協に寄付で集まった食品をAさん に届け、詐欺被害について弁護士に相談しました。し



紅林千津子 (相沢地区 民生委員児童委員協議会 会長)

出川 和義(相沢地区 民生委員児童委員協議会 民生委員)

平本 滋子(配食サービス 火曜の会 代表)

代理: 宮野 則子 (二ツ橋第二地域ケアプラザ 地域活動交流コーディネーター)

井 幸子(ニツ橋第二地域ケアプラザ 主任ケアマネジャー)

かし不動産の契約自体が巧妙で罪にならないことがわ かり、家賃の滞納を改善するために動きました。

成年後見制度の利用、介護保険の申請、そしてさらなる被害に遭わないように民生委員による日常の緩やかな見守り、ケアプラザやケアマネジャーによる訪問、玄関の中に警告する張り紙などをしました。成年後見人の弁護士に通帳管理をしてもらい、生活費のみを年金から下ろしましたが、翌日には現金が持っていかれるなど、被害はなかなか収まりませんでした。

Aさんに関わる私たちはとても悔しくて、初めは完全な見守りのある施設に入所したほうが幸せなのではないかと考えました。しかしAさんは毎日カレンダーに×印を付け、今日は何曜日かを確認し、「火曜日はお弁当を届ける日」とメモを机の上に置き、「お弁当の配達は大事な仕事なの」とうれしそうに話す姿がありました。その様子を見て、Aさんにとって配食の活動は大切な役割であることを知り、Aさんの気持ちを大切に支援していく方法を考えようと思いました。

そこで地域ケア会議を開催し、町内会長、民生委員、 配食ボランティア、デイサービス職員、ケアマネジャー、 区社協、弁護士、区役所などが参加して、エコマップ を使用し、Aさんがどんな人で、周りにどんな人がいるかを共有しました。

紅林 話し合いでは、Aさんにこれまでのようにお弁 当の配達を続けながら地域で暮らしてもらうためには、 何ができるかをそれぞれの団体で考えました。

出川 私も話し合いに参加し、Aさん宅が賃貸になっていることを知り、大変驚きました。その後、業者のような人がAさんのお宅に来ているのを見かけ、声をかけると、雨漏りの修理だと言いました。賃貸住宅なのに、住んでいるAさんと雨漏りの話をしているのはおかしいと考えて、ケアプラザに連絡しました。

吉井 民生委員の出川さんが連絡をくれたことで、ケアプラザ職員が自宅に駆け付けることができました。その場で業者に名刺をもらい、その名刺を弁護士に渡しました。弁護士から業者に警告をしたことで、詐欺被害を止めることができました。

宮野 平本さんはAさんにしてあげられることはないかと配食ボランティア仲間で考え、Aさんに配食ボランティアを続けてもらいつつ、週に1度はバランスのよい食事を取ってもらうため、手伝ってくれてありがとうとお弁当を渡しているそうです。

紅林 民生委員は、地域の中でAさんを緩やかに見守 ろうと考え、折々にボランティアとしての支援協力を しています。できないことがあっても、周りのフォローでできることもたくさんあります。自宅に引っ込んでしまってはより状況がわからなくなるので、心配のある人が出てこられる地域を今後もつくっていきたいです。

吉井 成年後見制度の利用によって詐欺につながる契約の不安を解消し、周囲の支援で日常生活ができています。Aさんは地域と関わり、役に立ちたいAさんの思いを地域のたくさんの人が受け止め、住み慣れた自宅で現在の生活ができています。

宮野 平本さんは、無理はしないで楽しくボランティア 活動ができるような雰囲気づくりを心がけて、皆ででき ることを考え、活動していきたいと話されていました。

出てこられる地域」をつくっていきたいという心強い言葉をいただきました。日ごろから気がついたことをケアプラザに伝えているそうで、ケアプラザが身近な存在だからこそできるのだと思います。そうした地域と専門職の力あわせが、それぞれの地区の中でできていくと素晴らしいと思いました。権利を侵害されている方を守るということは、絶対必要なことです。だからといって、その人らしい暮らしから安易に引き離してしまうのではなく、Aさんの役割や居場所である活動を続けられるように支えていくことが大事だと改めて感じました。



困りごとを1人で抱え込まないために ~マンション内の見守り・共有の仕組みづくり~

ききょうの会/存田地域ケアプラザ【青葉区】

清水 私たちのマンションは昭和43年にできた7階 建てのエレベーター付きで、建設当初は、子育て中の 人が多く住んでいました。子どもたちも幼稚園から中 学校まで一緒に行っていたので仲がよく、洋服のお下 がりも回っていました。

一緒に子育てをし、お互いに助け合う関係が自然にできていました。マンションの共用廊下が広く、1間の幅があるため、廊下がお母さんたちのたまり場になり、同じフロアごとに仲良くなっています。

また、理事を各フロアから1号室、2号室、3号室と 輪番制で選んでいるので、そこで縦の連携もできます。



清水 雅子(ききょうの会代表)

今井 博子(ききょうの会 メンバー)

和久井聡子(荏田地域ケアプラザ 社会福祉士)

藤枝 知(荏田地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター)

今井 マンションの中でお互いに相談して、お互いさまということでやってきました。ところが、その中で一人では解決できないことが出てきたため、困ったことを仲間で共有して解決の糸口を探りたいと思うようになりました。

和久井 そんな時、ケアプラザの地域包括支援センターにAさんという住民から相談が入りました。同じころ、生活支援コーディネーターのほうには、マンションの住人より「最近、何人かがAさんからの相談を受けて悩んでいる」という話が入りました。そこで世話好きの住民でもある清水さんに「住民支え合いマップ」をやってみませんかと声をかけ、やってみることになりました。

住民支え合いマップとは支援の必要な人と関わりの ある人とのつながりを地図上に表して、みんなで確認 し、日頃の支えあいや見守り活動に生かしていく取組 です。まず清水さんにお願いし、マンションの住人を 3名選んでもらいました。ケアプラザからは民生委員 と青葉区社協に声かけし、実施しました。

清水 実際に住民支え合いマップをやってみて、このマンションでは日常的に自然に助け合いができていたことがわかりました。病気で動けない人には器用な住民が髪の毛を切ってあげたり、爪を切ってあげたり、そんなことが日常的にマンションの中でできているということが見えてきました。

今井 これまで住民からの困りごとの相談をそれぞれが受けてきましたが、これからはお互いに情報交換して、見守り合って暮らしていけたらいいと思うようになりました。深刻な相談を受けたときはケアプラザに橋渡しをすればよい。そして、せっかく集まった世話好きたちで「ききょうの会」というグループをつくろうということになりました。ききょうの花言葉は、永遠の愛、変わらぬ愛、気品、誠実です。

清水 ききょうの会の発足によって、一人で抱え込まずにみんなで支援していけるようになりました。

私たちは2か月に1回定例会を開催しています。その中で気づいたことを、皆さんと相談できること自体が大きな収穫だと思っています。そして、毎回ケアプラザが同席してくださり、相談もできるので、大変心強く思っています。

例えば、今井さんと同フロアの方が、よその家の玄

関をドンドン叩いたり、「物がなくなった」などの訴えが頻繁になってきました。「そろそろケアプラザに相談したほうがいいね」ということで、今井さんと一緒に彼女を連れて相談に行きました。同居の息子さんは仕事をしていて昼間はお会いできないし、お母さんの状態に気づいていなかったので、ケアプラザに相談することは手紙で知らせました。その後、病院を受診して、認知症という診断が下り、介護保険のサービスで週1回デイサービスに行けるようになりました。

今井 私は、その方がデイサービスの日の朝に、玄関の前で一人で怒っているところにバッタリ会いました。私は同じフロアに住んでいるのですが、彼女が怒っているときには、落ち着いてゆっくりしゃべるよう心がけています。そこで、ゆったりと「おはよう。デイサービスを待っているのね」と言ったら、彼女が怒った顔で振り向きました。そこで私が「デイサービスは楽しい?」と聞いたら、「楽しいわよ」と心からうれしそうな表情に変わって、「カラオケができるのよ。昔の歌が歌えるの」と答えてくれました。しばらくお話ししていたらお迎えの車が来て、一緒に車のところまで行きました。職員が下りて彼女を乗せた後、「少し遅れるとお電話したのですが、彼女に伝わらなくて」と謝られ、彼女が送迎車が遅れて怒っていたことがわかりました。

清水 このように認知症の方は、知っている人だから こそ安心して話ができる面があるため、それぞれみん なが目をかけるようにしています。

今井 今はお互いに情報を話し合うことで、このまま見守ったほうがよいか、ケアプラザに相談したほうがよいか、みんなで判断できるようになり、「肩の荷が下りた」と言う会員もいます。

和久井 ケアプラザの相談では生活の一部しか見えてこなかったのですが、「ききょうの会」の定例会に参加することで、日常の中でどんなことが起きているのかが見えるようになりました。そして、支援方針のヒントが得られるようになりました。今後は、地域の皆さまから届くいろいろな声を参考にしながら、大変な状況になる前に適切なタイミングで支援をしていければと思っています。

藤枝 生活支援コーディネーターとしては、同じよう な取組がエリア内に広がってほしいと思っています。 見守りグループ同士が交流し、互いの活動を参考にしながら、見守りの裾野が広がる、見守り・見守られる 地域づくりを地域の皆さんと一緒に進めていきたいと 思います。

今井 今は個人情報、プライバシーということが言われ続けています。それは大切なことですが、これからも私たちはあいさつを続け、困った人が気楽に声をかけられる会をつくっていきたいと思います。今はその土台づくりの最中です。

清水 私たちが引越してきたころはちょうど子育て中だったので、地域の人たちにとても助けられました。 そのご恩があるので、今度は私たちが新しく転居してきた若い人たちに伝えていきたいと思っています。お節介おばさんかもしれませんが、つながるきっかけを 強引につくるように努力しています。

洋服のお下がりのやりとりをはじめ、子育て をしているときに自分が助けられたことが順 繰りにつながっていくのは素晴らしいと思います。

清水さんのような「世話焼きさん」を発見すること は地域で非常に大切です。支え合いマップをご紹介い ただきましたが、地図を出しながら、「どの人が誰を気 にかけている」などを実際に落としていくと、世話焼 きさんが見つかるといわれています。

また、自らSOSを出せない人もいるので、しなやかに 粘り強く関わっていただくのは素晴らしいことです。

お二人のマンションの見守りは堅苦しくなくていいなと感じました。横浜市はマンションがたくさんあるので、こうした取組がマンション内でどんどん進んでいくといいと思います。

分科会 **1**

まとめ コーディネーターからのコメント

突然ですが、皆さんこの1か月の間に見知らぬ他者 を助けたことがありますか?

イギリスのCAFという財団の調査によると、日本ではこの質問に、「あります」と言った人が12%、「寄付をした」が12%、「ボランティアをした」が12%でした。日本はこの三つの数字の合計が、調査した世界114カ国の中で、最下位でした。日本人はつつましいので、助けていても謙遜して答えない人もいるかもしれないので、調査の妥当性はさておき、日本人は世界中で一番助け合わないということになっています。

同じように、こくみん共済コープが行った調査で、「自分が困っているときに知っている人に助けを求められる」は36.7%。さらに、「知らない人が困っていたら積極的に助ける」は20%程度、「知らない人に助けを求められる」はたった25.8%でした。つまり、日本人はSOSを出すことが苦手な人が多く、知らない人に手を貸すことも苦手なのだと思います。

ここで一つ、詩を紹介します。これは「お友だちなの?」という詩で、阿部志郎先生という横須賀基督教社会館の館長の本に出ててきた詩を引用したものです。

「それほど混んではいない電車でした。二俣川について降りようとドアのほうに向けた白い杖の私に、つと立ってきて、ドアからホームへ手を貸してくれた方

がありました。ホームに降り、礼をいって歩きはじめたとき、その方が連れていたらしい女の子のあどけない声が聞こえました。『あの人、お父さんのお友だち?』その方は答えました。『そう、お友だちだよ』と。笛が鳴り、扉が閉まって、線路の響きは遠く消えたけれど、…友だち…友だち。見知らない方のあのひとことは私の心を温めてくれる本当にうれしいひとことでした」

小さい子どもは、お父さんが手を貸したのだから、 よく知っている友達だと思ったのでしょう。そこで 「そう、お友達だよ」と自然に言える人間になりたい と私は思います。

これは三木清さんという戦後すぐ亡くなった有名な哲学者の本の中の一節です。「孤独は山になく、街にある。一人の人間にあるのではなく、大勢の人間の『間』にある」。だとしたら答えは、人が何とかしていくしかないわけです。先ほどの清水さんのように、誰かに声をかける人が必要です。困っている人から発信することは難しいのですから。

「福祉は普段の暮らしの幸せ」と言いますが、「気にかける」範囲を少し広げること、皆さんが「お友達だよ」と言える範囲を広げていくことではないかと思います。 そして行政は地域の皆さんを支えて、一緒に協力しながら進めていくことが重要だと思います。



「私のまち」を 「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~



この分科会2では、「『私のまち』を『私たちのまち』 に〜連携で広がる地域の可能性〜」について、事例を 交えながら皆さんと共有したいと思います。

タイトルにある「私のまち」から「私たちのまち」になるということは、「私」が一人ではないと思えたときに「私たちのまち」になるのではないか、と理解できると思います。まちの誰かに起きた出来事を自分には関係ないと言えば、それは「私」がただそこにいるだけです。しかし、まちの出来事が「私」とつながっている、何か関係があると思えたとき、「私たちのまち」と感じることができます。そこから、地域の困っている人の問題が「私」の問題でもあると思えたときに、これは「私たちのまち」の問題であると捉えられるようになってくるのではないかと思います。

誰もが病気やけがなどで仕事や収入を失い、大事な 家族を亡くす可能性があります。仕事や健康、家族な どを基に幸せだと思えていたのが、そういったものを なくした瞬間に幸せを感じられなくなってしまう。お いしいと思っていたご飯もおいしいと感じられなく なってしまうことは、誰にでも起きる可能性がありま す。すごく幸せに生きているときはこういうことに気 づくことができません。だからうまく暮らせていない 人を見て、「大変だね」と人ごとのように思っている 人も、少なからずいるのではないかと思います。

地域ではこのような問題が、複雑化・多様化して起こっています。お金がなくて病院に行けない。自分の病気が進行した上に家族も失った。本当にいろいろなことが重ねて起きてしまうことがあります。要介護×低所得、それに加えて孤独感。病気で一人暮らし×多重債務。親の介護×子育て×失業。さらにアルコール



コーディネーター

渡辺 裕一 (武蔵野大学 人間科学部 社会福祉学科 教授)

依存症になってしまった。いろいろな困難が、このように「掛け算」で発生する状況が生まれています。

誰もがそんな生きづらさを抱える可能性がある地域で、「私たちのまち」をともに安心して暮らせるまちにするために、まずは生きづらさが起きている状況を、生きづらいと感じている本人の責任にしない、という見方がとても大事です。例えば、50メートルしか歩けない人は、100メートル先のスーパーに買い物に行けませんが、地域の中で手伝いがあれば買い物問題は解決できるかもしれません。つまり個人のせいで生きづらいのではなくて、地域や社会との関係の中に生きづらさがあるのです。

まちに自分の居場所が感じられない人たちが、それ ぞれ力を発揮できるようにつながりあい、力を発揮し あうまちをつくっていくことができれば、誰もが「私 のまち」と感じられるのではないかと思います。

この分科会で多様な人や人々、組織や団体、機関、会社などがつながって連携して地域の可能性を広げていく、そんなイメージを持っていただきたいと思います。そして掛け算でやってくる困難に対して、「私たちのまち」は掛け算で立ち向かってみてはどうでしょうか。今日はその掛け算を三つの事例から教えていただいて、掛け算の事例をたくさんつくるきっかけにしていただければと思います。



実践報告

ふらっと麦田 ~ケアプラザの場を活かしたゆるやかなつながり~

麦田町発展会/児童養護施設聖母愛児園/ 麦田地域ケアプラザ【中区】

川崎 本日お越しいただくはずでした麦田町発展会の 昌山さんはスケジュールの関係で来ることができなく なってしまい、この日のために2日間かけて動画を撮 影してくださいましたので、後ほどご紹介します。

また、児童養護施設本郷ホームホーム長の西野さんは施設内でコロナが発生してしまい、来ることができません。代わりに心のこもったメッセージをいただいていますので、こちらも後ほどご紹介します。

本日はいらっしゃらないお二人の思いや情熱をお伝 えできるよう、精いっぱい頑張ります。

根本 ケアプラザと麦田町発展会の共催事業である「ふらっと麦田」は、令和4年度から始まったばかりの取組です。月2回(第2火曜日、第4木曜日)、ケアプラザの多目的ホールを「ふらっと麦田」として、すべての人に開放しています。また、ふらっと麦田を知ってもらうために、これまでに4回、ワークショップを行ってきました。

昌山さん動画メッセージ

昌山 麦田町発展会は、元町方面から山手トンネルを 抜けてすぐの麦田町で、広い地域の商店主たちを中心 とした発展会として活動しています。商店会ではなく て発展会と名乗ることによって、加盟店には医療従事 者、県議会議員・市議会議員など地域に関わるさまざ まな人も参加してくれています。

麦田町発展会では、ハロウィンの日にイベントを継続して行ってきました。これをもっと盛り上げるために、麦田地域ケアプラザに声をかけました。お互いの活動に関して話していくうちに地域のために一緒に何か企画ができないかと盛り上がっていきました。そこで、誰でも「ふらっと」立ち寄れる居場所づくりのために、ふらっと麦田を始めました。

とりあえずやってみようと始まった企画ですが、参加者同士でもつながりが生まれて自然とコミュニティーができていることに驚かされました。自分たちで考えていたことが地域のニーズと合っていると実感できています。また、地域でいろいろな活動をしてい



昌山 仁大(麦田町発展会)

西野 勉(児童養護施設本郷ホーム ホーム長)

川崎 博子(麦田地域ケアプラザ 所長)

根本 洸介(麦田地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター)

る人ともつながりができるで、同じように何か企画したい人が多くいることも知ることができて、今後の広がりに非常に期待が持てる状況になっています。

川崎 ふらっと麦田がスタートする前の年に、障害のある男の子がお母さんとけんかするたびにケアプラザにやって来て、出入りするデイサービスの車にあいさつする「仕事」をやってくれていました。ほかにも鉛筆を削ってくれたり、地域包括支援センターの職員が声をかけて一緒に朝顔を植えたりして、何となくその男の子がケアプラザを居場所としてくれているような感じがありました。

根本 ほかにもふらっと来る認知症の人もいました。 こんな人たちの居場所になったらいいな、という思い をケアプラザの職員全員が持っていたことが、この活 動のベースにあったと思います。

川崎 ある日、近くの児童養護施本郷ホームの西野さんから、「ホームで生活している将棋好きの小学5年生の男の子が、ふらっと麦田で将棋ができないか」と相談されました。その理由を西野さんは次のように話されました。

(西野さんメッセージ)

西野 児童養護施設の子どもは、親元を離れ知らない

地域で生活をしています。虐待などさまざまな背景が あり、かわいそうな子と思われがちです。いろいろな 支援はありがたいのですが、子どもは施設から一歩も 出なくてもさまざまな経験ができてしまいます。今回 の将棋に関しても、ボランティアを募ったら来てくれ る人がいたかもしれません。しかし、子どもたちから 施設の外へ出ていき、地域で多くの人と交流すること で子どもの世界が広がり、施設の子どもたちのことを 地域の皆さんに知ってもらえる機会にもなると考えて います。施設側が地域と積極的に交流をして施設を オープンにしていくことで、子どもたちは施設での生 活だけではなく施設がある地域での生活を意識できる ようになります。子どもたちは未来を担う宝です。子 どもが地域でさまざまな人とつながり、いろいろな経 験を経て成長していけることで、いずれ大人になった 際に地域を大切にする意識を持ち、地域を意識した生 活ができるようになると信じています。

根本 さっそく、ふらっと麦田で将棋ができるようにしました。このようにケアプラザの利用者や近隣の子どもたちの居場所だけではなく、麦田町発展会や聖母愛児園との連携により、活動が広がりみせるようになりました。認知症で針仕事の好きな人が、手づくりポーチをたくさんつくってくれたので、ふらっと麦田のワークショップの作品を持ち帰る袋として活用させてもらい、ご本人も子どもたちもとても喜んでくれました。また、デイサービスは行きたがらない高齢者がふらっと麦田での園芸作業に参加してくれたり、塾終わりのお兄ちゃんを待っているお母さんと弟さんがピアノを弾いて過ごしていたこともありました。

ふらっと麦田を使って地区社協、民生委員、地域で活動している人たちが集まって座談会をしたこともあります。座談会の横では親子連れが自由に過ごしていて、雑多な空間になりました。座談会で次期主任児童委員のなり手が見つからないという話題になり、ふらっと麦田に地域活動に興味があるという人が来ていて、結果的に主任児童委員を引き受けてくださいました。 川崎 今後に向けて西野さんと昌山さんのメッセージをご紹介します。

西野さんメッセージ

西野 将棋の件でふらっと麦田にお世話になったことで、発展会の存在を知りました。地域を盛り上げたい

と考えている人とつながれたことは非常に意味のあることだと感じています。これからは、施設の子どもたちが就労体験をしたり、ごみ拾い活動をして地域をきれいにしたり、さまざまなイベントが行えると思います。地域とつながりを深めていきたいという思いを行動に移すとき、まずはふらっと麦田へ『ふらっと』訪れて相談したいと思います。

(昌山さん動画メッセージ)

昌山 まだまだ始めたばかりなので、地域の人たちのニーズを掘り起こしていかなければいけないと思っています。自分たちが企画しなくても地域の人たちが地域に愛着を持っていろいろなことを積極的に企画して、自分たちがサポートする立場になっていければいいかなと思っています。

根本 連携するに当たり、一人ひとりの思いをどうしたら実現することができるかを考えてみました。地域に住む一人を中心にみんなで考えて実現し、ふらっと麦田が大切な居場所、部室や実家のような心地良い場所になってほしいと思っています。また、思いだけで走り出したために、正直、支えてくれる側の人はまだまだ少ないのが現状です。ここに出入りする人がこの場所を支える人になってくれるようにしたいと思っています。

ふらっと麦田の活動が掛け算で動いてきているのが、よくわかりました。麦田町発展会と聖母愛児園とがつながっていったのは、ふらっと麦田があったからでした。ふらっと訪れて、ふらっと相談ができるような場所があったから、いろいろな人がつながることができたということです。「ふらっと」をケアプラザの皆さんは必要だと思っていました。さらに発展会もふらっと来ることの大事さを理解してくれました。「とにかくやってみよう」からスタートして、トライ・

アンド・エラーをしながら模索していたという発展会の考え方があったと思います。そこからの掛け算が活動につながったのかと思いました。「取りあえずやってみよう」がすごく印象的です。今回の将棋のことをケアプラザに相談してみよう、と発想した西野さんのセンスはすごいなと思いました。ケアプラザの気づき、発展会の地域のために何かしたいという思い、聖母愛児園の子どもたちが地域とつながれるようにというマインド。この三つの「掛け算」が、これからもふらっと麦田を発展させていく仲間になると思いました。



多様な主体で暮らしを支える ~想いをつなぐ「泉サポートプロジェクト」~

特別養護老人ホーム白寿荘/養護老人ホーム白寿荘/ いずみ野地域ケアプラザ/泉区社会福祉協議会 【泉区】

中川 泉サポートプロジェクト(「サポプロ」)の目的は、「あらゆる機関が住民と共に地域貢献活動を検討・ 実施していくことで誰もが安心して暮らし、助け合えるまちづくり」で、地域の困りごとへの支援だけでなく、福祉のまちづくりを進めていくことをめざすプロジェクトです。

平成28年の社会福祉法改正により、社会福祉法人に対して地域における公益的な取組が改めて求められるようになりました。泉区内の施設が連携し、公益的な取組を一層進めるために、泉区社協の会員によって構成されている専門機関部会が主体となり、プロジェクトが立ち上がりました。また、同じ平成28年度には生活支援体制整備事業の取組が始まりました。

事業の実施に当たり、区社協と各ケアプラザに配置 された生活支援コーディネーターが地域と施設などの つなぎ役として活躍し、サポプロは生活支援体制整備 事業と並走して発展してきています。

草島 高齢化に伴い一人での外出が難しくなり、引きこもりがちになっている人のご家族からの相談を契機に、高齢者の外出支援について、養護・特別養護老人ホーム白寿荘も交えて協議会で検討することになりました。すると、白寿荘から、送迎車両と運転手の派遣の申し出をいただきました。そこで、ケアプラザでボランティアを募集し、「お出かけサポーター」というボランティアグループが結成され、外出支援を実施することが決まりました。

しかし同じ時期に新型コロナウイルス感染症の流行が拡大し、車両ではなく車いすや徒歩での外出支援に切り替えることとなりました。そこでボランティア向けの車いす操作などの研修の講師を自寿荘が担っていただきました。またほかにも男性の料理教室の講師として管理栄養士の派遣、スタンプラリーのイベントの企画・協力、さらに当ケアプラザのエリアを超えた高齢者の外出支援にもご協力いただいています。また反



工藤 達也 (特別養護老人ホーム白寿荘 施設長)

伊藤 祐樹 (養護老人ホーム白寿荘 施設長)

草島 佳子(いずみ野地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター)

中川 直樹(泉区社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

対に白寿荘から入居者の外出支援の依頼があり、お出 かけサポーターを派遣しました。

伊藤 白寿荘では、「地域の一員として共に日々を過ごし困ったときは助け合う」、「同じ目線に立ち『共に』を大切にする」、「地域に根差した福祉施設としてできることがある」、「地域に頼られる存在でありたい」、「地域からの声を大切にする」、といった5項目を大切にし、地域貢献活動に取り組んでいます。

しかし平成12年の介護保険制度スタート当初の白寿荘では、職員は業務量の負担感から、利用者を断る理由を探す場面も見られました。当時、「居宅介護支援事業所のケアマネジャーは、最後の最後に白寿荘への利用確認を行う」と近隣事業所でうわさになったと聞いています。その理由は「いつも空いているから」。何とも屈辱的な言葉でした。

このままではいかん。入居者にとって暮らしやすい 施設になるように、家族から信頼される施設になるよ うに、職員が誇りを持って仕事ができる施設となるよ うに、われわれは施設を立て直すことに必死になりま した。

少しだけ誰かの助けを必要とする人が住んでいる場 所が養護老人ホームです。敷居は決して高くないと 思っていましたが、中からと外からでは印象が違っていたようです。どうすれば白寿荘を知ってもらえるのか。

まず取りかかったのは、スタッフ考案による「コーヒーを楽しむ会」というクラブ活動でした。入居者だけでなく、地域の人にもコーヒーを振る舞ってはどうか。玄関にのぼりを立て、コーヒーショップの店員のような格好をしました。スタッフの提案が地域活動への第一歩となりました。

工藤 施設スタッフの提案からだんだんと地域へ出向くことも多くなり施設の変化が出始めたころ、施設と地域をつなぐために次の三つを掲げることにしました。それは、「『断らない』に挑戦しよう」、「できないではなく、できることは何かを考えよう」、「だったら楽しんじゃえ」です。

続いて、地域貢献活動を組織的なものとするために 次の三つを実行しました。

一つ目が、白寿荘の通所部門(デイサービス)における地域貢献活動に専念できる時間の確保です。通所部門は地域との連携が強く求められると考え、通所部門の業務を精査し、スタッフが地域貢献活動に専念できる時間の捻出を行いました。

二つ目が、統括の担当の配置です。通所部門が実施した地域との連携の大切さを短期入所部門(ショートステイ)、本入所部門(施設入所)と共有できるよう、白寿荘全体を統括するスタッフを置き、組織づくりに着手しました。

三つ目が地域貢献活動専属スタッフの配置です。施設本来の業務である「スタッフの介護における専門性を向上させること」と、「地域に出向き、地域との連携強化を図ること」は白寿荘にとって大切な柱となります。この柱を強化するための専属スタッフの配置に着手したのです。

白寿荘の活動が地域の活動と一体となり、泉区に住むことは安心につながるといった地域のお役に立ちたいと考えています。私たちにとって地域貢献活動は、ほんの小さなできることから挑戦することだと考えています。私たちは「自らが動きたい」や「やってみたい」をみんなで考え、楽しみながら地域貢献活動につなげたいと思っています。できない理由ではなく、ほんの小さなできることから挑戦していきます。

中川 法人の規模とか、そこにおけるマンパワーとか、 やれることはそれぞれだと思います。大きな施設がた くさんのことをやっているから、そこの基準に合わせ てみんなが動かなければならないとなると、これは決 して継続できる取組にはならないと思っています。

地域の人が散歩をしたときに「施設のトイレを使ってください」という一声とか、そういった小さな心持ちをつなぎ合わせて、できる範囲のことをやることです。そこまではできないが、ここまでならできるといった活動を自信を持って継続する。それらをつなぎ合わせた結果、地域の人の役に立っていればいい、という共通認識を職員が持っていられるのが大きいと思っています。

伊藤 地域貢献活動を始めようとしたとき、一部の学校との取組はありましたが、その他の関係機関との連携は十分ではありませんでした。その後、近隣のいずみ野地域ケアプラザに相談して、スペースの提供や講師の派遣などの交流ができ、地域とのつながりが一気に広がりました。

今回のいずみ野地域ケアプラザの取組は、白寿荘との素晴らしい連携・協働によって生まれたと思います。そして、みんなが無理せず活動することが自然にできています。何かをやろうとすると誰かが無理をして、誰かに負担がいってしまう。その人がうまくできなくなって活動が動かなくなってしまった、ということが起きないようにされているところが、すごく大事だと思いました。

白寿荘は、職員が楽しいとか、特技にしていることが生かせる職場になっているなと感じました。入居者も地域で暮らしている。だから地域で一緒にいろいろな活動ができたり、出かけたりすることで、入居者のクオリティー・オブ・ライフ(生活の質)が高まっていっているという実感をされているわけです。施設職員も、入居者を施設の中ではなくて地域の人だという意識が、地域貢献活動を一生懸命やる理由になったと思います。そういう視野で多くの高齢者施設の職員がお仕事していただけると、白寿荘のように変わっていくと思います。



外出を支える 暮らしを見守る タクシー会社との連携

小菅ヶ谷地区社会福祉協議会/株式会社ケイサンタクシー/ 栄区社会福祉協議会【※区】

若尾 「バス停まで歩くのに自信がなくなってきた」、「外出したいけど、歩くのにとても不安がある」といった地域の声や、「歩くことが不安でサロンへ来られなくなった人がいる」といったサロンの声が、この取組のきっかけとなりました。こうした声を受けて栄区社協では、高齢者の外出支援の手段について検討するなかで、神奈川県タクシー協会との意見交換(令和元年12月)などを通して、区内の二つのタクシー会社(イースタンタクシー、ケイサンタクシー)にお願いして、令和3年12月から「相乗りタクシー」と「見守りタクシー」に取り組むことにしました。

相乗りタクシーは、サロンや買い物、同じ目的地に行くために近所や仲間同士で乗り合うタクシーです。 会計については、それぞれが払うと手間がかかるので、 団体が一括で払う後払いにしてもらいました。

見守りタクシーは、タクシー会社が日常の業務の中でタクシーを利用している人に何か異変に気づいたら、専門機関へ連絡するというものです。「見守りがどうして必要なのか」、「どういうところを見守ってほしいのか」などについては、栄区社協がドライバーに研修会を行っています。これを定期的に行うことで、ドライバーと生活支援コーディネーターが顔なじみの関係になっています。

さらに、相乗りタクシーと見守りタクシーを同時に使うことで効果が出てきます。これを「あいタク」と 栄区では命名しました。令和4年度はこれまでに「あいタク」で58名が外出できました。利用した人たちは、雨の日、暑い日の外出を諦めていたのです。「タクシーが送迎に来てくれたから、サロンに行けた」、「家の前まで来てくれるから安心」、「お姫さまみたいだったわ」と喜んでくださいました。また「タクシーを身近に感じたから、今後は自分でも呼んで外出してみたいな」と外に出たい気持ちが生まれ、「お友達と一緒にサロンに行けるのがとてもうれしい」という声も聞か



岸 信人 (株式会社ケイサンタクシー 所長) 田中 伸一 (小菅ケ谷地区社会福祉協議会 会長) 若尾ちづる (栄区社会福祉協議会 生活支援コーディネーター)

れました。

岸 まず、相乗りをやってみようと思ったのは、比較的昼間の空いた時間帯ということと、うちの会社は小回りが利くので、こういう仕事からこつこつやって地域住民に知ってもらえればというのが理由です。乗務員の中には協力したいと言ってくれる者もいます。まずはやってみようか、というところから始まりました。弊社ではすでに子育てタクシーや学童の送迎も実施しており、相乗りタクシーのような仕事はある一定の経験はありましたので、結果として一人でも多くの人が外出するきっかけ、タクシーを利用するきっかけづくりができればお互いにプラスになると考えています。

実施してみての感想ですが、利用する側・される側の双方でいちばんネックとなる部分が金額的な問題です。料金捻出の苦労話を聞くと、ここは行政に補助金などを捻出していただいて、多くの高齢の人に外出してもらうきっかけづくりが急務です。家に閉じこもっていいことは何一つありません。外に出ることでいろいろな人とコミュニケーションを取っていつまでも元気に動いて、もっとタクシーという乗り物を身近に感じて利用していただきたいと思いました。また利用した人からの声として、「乗ってよかった」と言っていただけると、乗務員もすごく励みにもなりますし、次

への意欲につながると思います。

タクシー運転手は、社長をやっていた人から学校を出てすぐ運転手になった人など、いろいろです。タクシー運転手は、奉仕の心がどこかにないとできない仕事だと感じています。この時代に「あいタク」のような仕事に、きちんと対応できるドライバーでなければ残っていけない。こういう仕事ができない人は何をやらせてもできないと思っているので、厳しいところは厳しく、やさしくするところはやさしく、所長としてドライバーに接しています。「すごく喜んでいただいたよ」と伝えるだけで、乗務員は年齢や経験に関係なく喜びます。ドライバーの給料は歩合制ですが、運賃ではなく、その言葉が励みになると思います。まだまだ人も車も少ないですし、そういうところからやっていけたらと思います。

田中 実管会は小菅ヶ谷地区社協が主催し、ボランティアや民生委員などによる実行委員会形式で運営しています。今年で27年になる、非常に歴史のあるサロンです。この会の目的は、障害のある人や加齢に伴い体が不自由になってきた人などが、地域で楽しい日常生活を心豊かに暮らせるようになることで、月1回開催しています。

サロンに参加する条件として、ご自身で何とか会場まで来られることを一つの前提としています。ところが参加者から、「実菅会はとても楽しいのですが、会場まで行くのにバス停まで歩くのが大変」、「雨の日や暑い日、寒い日も大変」という声が寄せられていて、私たちも困っていました。今回、あいタクの話が栄区社協からあって、これは良い話だなと、地区社協やボランティアと話し合いを行いました。

無料では良くないので、1回の送迎で300円を利用者にご負担いただくことにしました。利用者アンケートの結果、6人から「ぜひ利用したい」という申し出があって、「見切り発車」することになりました。これまでの4か月で4回利用して、大まかな試算ができました。まず年に10回サロンを開催するとして、1回当たり2台のタクシーをお願いします。その結果、月に平均6,500円かかることがわかりました。年間に6万5,000円かかりますが、年間2万円の補助が栄区社協から出ます。利用者負担は、6人といっても体調の悪い人もいるから1回当たり5人として、往復300

円×5人×10回で年間に1万5,000円程度。残りの 3万円は小菅ヶ谷地区社協と交渉しています。

ここで送迎に当たって利用のルールを実菅会と区社協、タクシー会社の三つでつくりました。区社協に実菅会の担当者が、参加者名簿、サロンの開始時間、迎えの時間についてFAXで連絡します。区社協はこれを受けてタクシー会社に連絡をします。連絡をもらったタクシー会社は、この日の迎えの順番や時間を決めて区社協に連絡します。区社協はこの内容をまた実菅会の担当者に伝えます。

利用者からは「会場に行くまで、あるいは帰りが大変だったけど、あいタクを利用できてとても楽になった」、「楽に実菅会に参加できて実菅会がさらに楽しくなった。来月が待ち遠しいです」という声をいただいています。また、タクシー会社の運転手がとても親切で感じのいい人ばかりで、感謝を申し上げたいと思っています。

私ども小菅ヶ谷地区社協としては、今回のあいタク 利用は参加者から好評ですので、今後も続けていきた いと思っています。希望を言えば、横浜市社協や区社 協、そして行政からも、もう少し何らかの方法であい タク利用団体に補助金の増額をする仕組みをつくって いただけたら助かります。

若尾 タクシーが身近になれば、地域の人の顔も覚えて変化に気づく「地域タクシー」になります。タクシードライバーによる24時間365日、途切れることのない緩やかな見守りが可能となります。どうぞ皆さんも持ち帰っていただいて、タクシー会社の門をたたいていただければと思います。



※分科会につきましては、敬称を省略させていただきます。

タクシーによる外出支援の仕組みは、全国各地にあります。例えばタクシー券を交付している自治体がありますが、乗り合いや家族が一緒に乗ることはだめですとか、病院や市役所など行き先が限定されているなどの制限が付いている場合があります。「こんなに制限が入ったら使えないよね」と利用されずに、予算が執行されない自治体もあるそうです。逆に「乗り合いタクシー」を始めたら、ちょうど予算内でタクシー券が動き始めたという自治体もあります。使用目的を緩和したらどうな

るのか、その自治体でも不安はあったと思いますが、タクシー券が外出のニーズに合ったということでしょう。 栄区の「あいタク」とつながってくる話なのかと思います。

田中会長が、とてもいい運転手が来てくれると感じられているのと同時に、岸所長がご苦労されながら送り出した運転手も将来生き残っていくための大事な学びを得る。そして運転手の研修実施と年間2万円のサロンへの補助金の約束をした区社協が支えている。この3者の良い関係が見えてきました。

分科会 **2**

まとめコーディネーターからのコメント

三つの地区それぞれに形がありましたが、多くの方が力を発揮している姿がすごくわかったと思います。 その力が何で発揮されたのかを見たときに、お互いの存在に気づいたところが、力を発揮するスタートになっていたのではないかと思います。

児童養護施設や老人ホーム、タクシー会社は、地域の人たちからすれば敷居が高いと思われていることが多いかもしれません。だから、地域で何かが必要になったり、協力してもらいたいと思ったときに、「相談してみよう」と思いにくいところだったかもしれません。しかし働きかけをしてみると、活動を理解して地域のことにすごく関心を持っている施設長や所長がいた。そこからつながって、地域に向けて力を発揮してくれる。施設の入居者のケアも地域の大事さも理解して、地域に関わっていただいたわけです。

もしかしたら老人ホームに入居している皆さんは、ここは「私のまち」だけれども「私たちのまち」だとは思えていなかったかもしれません。いろいろな活動や人のつながりで地域に出る機会や地域の人が来る機会をつくることで、施設に入所している人たち、働いている人たちもここが「私たちのまち」だと思えるようになったのではないかと思いました。

私たちの活動は、私たちが「私たちのまち」だと感じられるだけではなくて、そこに関係する皆さんにも「私たちのまち」だと思ってもらえるような活動です。だから自分たちだけでやるのではなくて、いろいろな人と一緒にやることで、いろいろな人たちが「私たちのまち」だと感じられるチャンスをつくっていくこと

になると思いました。

今回の三つのご発表で共通していたのは、やってみようという思い切り、田中会長からは「見切り発車」という言葉もいただきました。うまくいかないかもしれないからやらないではなくて、うまくいかなかったらまた考えよう。そこで仲間たちが一緒に考えるわけです。そういう関係性があるので、思い切って実行に移すことができたのかなと思います。

それぞれの団体では、地域の人が困ったところを しっかりキャッチしていたと思います。例えば、ふ らっと寄れる場所がほしいと思っている人が地域にい ることとか、サロンに行きたいが、移動の方法がない から行けない。自分で行かなければいけないことに なっているが、一人で外出するには不安がある。そう いうときに「こういう方法があるね」と、一つひとつ の困難にしっかり向き合って取り組まれたところに新 しい活動が生まれてきたと感じました。

実際にサロンを運営している人たちの中にはよく、「本当は来てほしいけれど、自分で来なければいけないというルールがあるから、誰か一人にだけ特別なことはできないのです」、「あの人は来られなくなってしまったけれど、今はどうしているかな」という苦しい声が聞かれます。それが、「お出かけサポーター」や「相乗りタクシー」のおかげでもう一度つながれるチャンスになったことが素晴らしいと思いました。

皆さんが話を聞いて何かやってみようというお気持ちになれたら、一歩前に進んでいただけたら幸いと思います。

第7回 よこはま地域福祉フォーラム



よりそい 続ける つながりを育む

~「おたがいさま」のこころが紡ぐ豊かなまち~

開催要綱

私たちのまち横浜では、普段の暮らしの中で様々な見守り、支えあい活動が育まれてきました。こうした 活動を広く共有することで取組の輪を広げ、困りごとを受け止め支えあえる地域をめざしていこうという思い から始まった「よこはま地域福祉フォーラム」は、今年で7回目を迎えます。

コロナ禍により日々の暮らしが変わりゆく中でも、つながりがもたらす豊かさを見つめなおし、地域に根付 いてきた支えあいの取組は、しなやかに形を変えながら少しずつ広がりをみせています。

困りごとを抱えた人を同じ地域の一員として受け止め、暮らしに寄り添う支えあいや、社会福祉法人、 企業などが地域とともに課題に向き合う取組。また、支える側・支えられる側の区別なく、自分らしく暮らせ るまちづくりなど、「おたがいさま」のこころが身近な地域の中で着実に育まれています。

本フォーラムを通して、今改めて身近な地域の中で寄り添い続けることの意味を見つめなおし、誰もが 孤立することなく自分らしく暮らしていくために、私たち何ができるのか、皆さんと一緒に考えていきます。



令和5年2月**1**日(水) ~ **3**月**24**日(金)



全体会(基調講演)

人ひとりによりそえる地域へ ~ともにいる日常を育む~ |

奥田 知志 氏 (NPO法人 抱樸 理事長)

分科会

分科会1 緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ

~つながりの価値を見つめなおして~

関内ホール (横浜市中区住吉町4-42-1)

分科会2 「私のまち」を「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~



録**画配信** (You Tube)

- ※ お申込みをいただいた方には、後日メールにて資料ダウンロード、 及び受講に必要なURL・パスワードをお送りいたします。
- ※視聴に関わるインターネット通信費用は視聴される方のご負担となります (基調講演:1時間30分、分科会:各2時間45分程度)

参加無料

【主催】横浜市社会福祉協議会 ・ 18区社会福祉協議会

【共催】横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局

一人ひとりによりそえる地域へ

会場

関内ホール 大ホール

10:30~12:00 定員 500名

~ ともにいる日常を育む ~

ほうぼく

おくだ ともし

NPO法人 抱樸 理事長

奥田 知志 氏





社会環境や家族の形が変わりゆく中で、社会的孤立は多くの人に とって身近にある課題として認識されるようになりました。「つながり」 を求めながらも、多様化するつながりの形のなかで、その本質が見え にくくなっているのかもしれません。

生きづらさを抱え孤立しがちな一人ひとりに、同じ地域に住む住民としてどのように向き合い、そして「私たちのまち」で何ができるのでしょうか。

30年以上にわたり「社会的孤立」に寄り添い続けてきた実践を踏まえ、寄り添い続けることが何をもたらすのか、「自分らしく生きる」とは何かについて、ご講演をいただきます。

【講師プロフィール】

NPO法人抱樸理事長、東八幡キリスト教会牧師

1963年生まれ。関西学院大学神学部修士課程、西南学院大学神学部専攻科をそれぞれ卒業。

九州大学大学院博士課程後期単位取得。1990年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代から始めた「ホームレス支援」に北九州でも参加。事務局長等を経て、北九州ホームレス支援機構(現 抱樸)の理事長に就任。これまでに3700人(2022年3月現在)以上のホームレスの人々の自立を支援。

その他、共生地域創造財団代表理事、全国居住支援法人協議会共同代表、国の審議会等の役職も歴任。

第19回糸賀一雄記念賞受賞など多数の表彰を受ける。NHKのドキュメンタリー番組「プロフェッショナル仕事の流儀」にも2度取り上げられ、著作も多数と広範囲に活動を広げている。

【主な著書】

「いつか笑える日が来る」(いのちのことば社)

「助けて」と言える国へ(茂木健一郎氏共著・集英社新書)

「ユダよ、帰れ」(新教出版社)

「伴走型支援」(有斐閣)等

緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ

~つながりの価値を見つめなおして~



13:15~16:00 定員 500名

様々な事情により「生きづらさ」を抱える人に、地域の中で住民や団体・機関がつながり、支えあう取組が育まれています。 身近な地域でつながる住民ならではの支えあいの大切さと、住民と専門職がともに暮らしを支える地域づくりについて考えます。

コーディネーター: 同志社大学 社会学部社会福祉学科 教授 永田 祐 氏

実践報告

: ● 根岸地区社会福祉協議会・根岸地域ケアプラザ・磯子区社会福祉協議会

● 相沢地区民生委員児童委員協議会・火曜の会・二ツ橋第二地域ケアプラザ

● ききょうの会・荏田地域ケアプラザ

(瀬谷区) (青葉区)

(磯子区)

根岸地区社協 根岸地域ケアプラザ 磯子区社協

本当に困っている人と つながるために

~食支援からはじまる見守りの芽~

「自分たちの地域にも、暮らしに困っ ている人がいるかもしれない」。できる ことから始めようと地区社協が食品の 寄付を募り、支援機関とともに配分会 を実施。そこで、地域で孤立し、SOSの 発信ができない世帯と出会うきっかけ となった。取組を通じて感じた住民の 想いに迫る。

相沢地区民生委員児童委員協議会 火曜の会

二ツ橋第二地域ケアプラザ

地域の中で自分らしい暮らしを 続けるために

~ありのままを受け止め、 つながり続ける~

ボランティアで活躍していた方が、軽 度の認知症になり、詐欺被害に遭われ たことをきっかけに、住民と関係機関に よる見守りが始まった。「ボランティアを 続けたい」という本人の想いに寄り添い、 持っている力をどう発揮できるかを模索 していく。住民と専門職が本人の望む 暮らしをともに支える工夫を紐解く。

ききょうの会

荏田地域ケアプラザ

困りごとを 1人で抱え込まないために ~マンション内の見守り・ 共有の仕組みづくり~

築50年を過ぎた約40世帯のマンショ ン。住民同士の絆は強いものの、高齢 化などにより深刻な相談を耳にする機 会が増えてきた。相談を受けた住民が 一人で抱え込まないために、専門職とと もにマンション全体の状況把握を進めな がら、日頃の気づきを共有できる場を 作っていく。住民による見守りやつなが りを保つ秘訣を探る。

「私のまち」を 「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~

関内ホール 会場 小ホール

13:15~16:00 定員 130名

住民、福祉施設、企業、NPOなど地域にある様々な主体がつながり、取組を進めていくことで、地域の課題解決や まちづくりの新たな可能性が広がります。それぞれの強みを生かした連携のポイントについて共有します。

コーディネーター: 武蔵野大学 人間科学部社会福祉学科 教授 渡辺 裕一 氏

実践報告

: ● 麦田町発展会・児童養護施設 聖母愛児園・麦田地域ケアプラザ

(中区)

● 特別養護老人ホーム 白寿荘・養護老人ホーム 白寿荘 いずみ野地域ケアプラザ・泉区社会福祉協議会

(泉区)

● 小菅ヶ谷地区社会福祉協議会・株式会社ケイサンタクシー 栄区社会福祉協議会

(栄区)

麦田町発展会 児童養護施設 聖母愛児園 麦田地域ケアプラザ

ふらっと麦田 ~ケアプラザの場を活かした ゆるやかなつながり~

地域における様々な思いや取組をつ なぐ試みとして始められた「ふらっと麦 田」。対象や目的をゆるやかにすること で、垣根のない、人や活動のフラットな つながりや広がりの可能性が生まれて いる。

「ふらっと麦田」という場を通じて、地 域とケアプラザがともに目指すものとは。 特別養護老人ホーム 白寿荘 養護老人ホーム 白寿荘 いずみ野地域ケアプラザ 泉区社協

多様な主体で暮らしを支える ~想いをつなぐ 「泉サポートプロジェクト」~

福祉施設、企業等多様な主体が連携 し、地域のニーズを支える「泉サポート プロジェクト」。高齢者のサロン等への 送迎から始まり、そのまちの声に応じて 対象や取組が広がり続けている。

互いの想いを大切にしながら、どのよ うに地域のニーズに向き合い、関わりを 変化させてきたのか。それぞれの想い と連携の可能性を探る。

小菅ヶ谷地区社協 株式会社ケイサンタクシー 栄区社協

外出を支える 暮らしを見守る タクシー会社との連携

高齢者の外出に関する課題解決に 向けた、3区合同によるタクシー協会と の連携。栄区では地域の特徴を踏まえ ながら、タクシー会社による見守りの仕 組みづくりと、地域サロンへの相乗りタ クシーの活用による、外出の機会を支 える取組を進めている。福祉と他業種と の合意形成や連携のポイント、連携に よる取組の効果を紐解く。

配信期間

令和5年2月1日(水)~3月24日(金) 録画配信 ※配信期間終了の前日、3月23日(木)までに お申込みをお願いします。

第7回よこはま地域福祉フォーラム申込フォーム

下記URL または、右の二次元コードからお申込みください。後日、Eメールにて受講、および資料ダウンロードに必要なURL・パスワードをお送りいたします。

URL: https://bit.ly/3AmuleY



申し込みはこちら

主 催 横浜市社会福祉協議会 18区社会福祉協議会 共 催 横浜市健康福祉局 横浜市こども青少年局

協 力 神奈川県社会福祉協議会 川崎市社会福祉協議会 相模原市社会福祉協議会

関東学院大学 神奈川大学 鶴見大学 横浜市立大学

公益財団法人 横浜YMCA 認定NPO法人 横浜移動サービス協議会 公益社団法人 神奈川県介護福祉士会 公益財団法人 神奈川新聞厚生文化事業団 公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会

一般社団法人 神奈川県介護支援専門員協会 横浜市市民協働推進センター

一般社団法人 ラシク045

※ 文中は敬称略としています

(順不同)

〈個人情報の取扱いについて〉

参加申込書に記載された個人情報は、本フォーラムに係る企画、主催者用参加者名簿の作成・管理等、本フォーラム関連のみの目的で使用するとともに、本会「個人情報保護に関する方針」に基づき、適切に取り扱います。

(個人情報保護に関する方針 →https://www.yokohamashakyo.jp/kojin-joho/)



横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課

TEL 045-201-2090 FAX 045-201-8385 E-mail chiikifukushi-f@yokohamashakyo.jp https://www.yokohamashakyo.jp

〒231-8482 横浜市中区桜木町1-1 横浜市健康福祉総合センター7階

- ※「よこはま地域福祉フォーラム」は一部共同募金の配分金で実施しています。
- ※ プログラム中の各表題は仮題のため変更になる場合があります。ご了承ください。



■主催

横浜市社会福祉協議会

鶴見区社会福祉協議会・神奈川区社会福祉協議会・西区社会福祉協議会 中区社会福祉協議会・南区社会福祉協議会・港南区社会福祉協議会 保土ケ谷区社会福祉協議会・旭区社会福祉協議会・磯子区社会福祉協議会 金沢区社会福祉協議会・港北区社会福祉協議会・緑区社会福祉協議会 青葉区社会福祉協議会・都筑区社会福祉協議会・戸塚区社会福祉協議会 栄区社会福祉協議会・泉区社会福祉協議会・瀬谷区社会福祉協議会

■共催

横浜市健康福祉局 横浜市こども青少年局

■協力(順不同)

社会福祉法人 社会福祉法人 社会福祉法人 社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会・川崎市社会福祉協議会・相模原市社会福祉協議会

関東学院大学・神奈川大学・鶴見大学・横浜市立大学

公益財団法人 横浜YMCA

認定NPO法人 横浜移動サービス協議会

公益社団法人 神奈川県介護福祉士会

公益社団法人 神奈川県社会福祉士会

公益財団法人 神奈川新聞厚生文化事業団

公益財団法人 横浜市男女共同参画推進協会

一般社団法人 神奈川県介護支援専門員協会

横浜市市民協働推進センター

一般社団法人 ラシク045

令和5年

2月1日日~~3月24日日

第7回

よりそい続ける つながに育む 地 域

~「おたがいさま」のこころが続く豊かなまち~

全体会(基調講演)

-人ひとりによりそえる地域へ

~ともにいる日常を育む~

講師

奥田 知志氏

NPO法人 抱樸

動画配信(Youtube)

※お申込みいただいた方には、後日メール にて、受講用URLをお送りします。

分科会1.2

2

緩やかに しなやかに 気にかけあえるまちへ

~つながりの価値を見つめなおして~

① 本当に困っている人とつながるために

【磯子区】

~食支援からはじまる見守りの芽~

(2) 地域の中で自分らしい暮らしを続けるために

【瀬谷区】

~ありのままを受け止め、つながり続ける~ ③ 困りごとを1人で抱え込まないために

~マンション内の見守り・共有の仕組みづくり~

【青葉区】

「私のまち」を 「私たちのまち」に

~連携で広がる地域の可能性~

(1) ふらっと麦田

【中区】

~ケアプラザの場を活かしたゆるやかなつながり~

(2) 多様な主体で暮らしを支える

【泉区】

~想いをつなぐ「泉サポートプロジェクト」~

③ 外出を支える 暮らしを見守る タクシー会社との連携【栄区】

主 催:横浜市社会福祉協議会・18区社会福祉協議会

共 催:横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局

申込み:横浜市社会福祉協議会 企画部 企画課

TEL 045-201-2090

詳細内容、 お申込みは こちらから。



第7回 よこはま地域福祉フォーラム よりそい続ける つながりを育む ~ 「おたがいさま」 のこころが紡ぐ豊かなまち~

発行日 2023年3月

発 行 社会福祉法人 横浜市社会福祉協議会

〒231-8482 神奈川県横浜市中区桜木町1-1 横浜市健康福祉総合センター

TEL: 045-201-2090 / FAX: 045-201-8385

編集協力 特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター 制 作 七七舎

「よこはま地域福祉フォーラム」は共同募金の配分金を財源の一部としています

じぶんの町を良くするしくみ。赤い羽根共同募金

